

時

に

昔

の

話

を

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

時には昔の話を

※本作は個人作の非公式ファンブックです。

※本作内容は原作関係者様含め、いかなる実在の個人、団体、思想、宗教等とも一切関係ありません。

※本作には一部
シナリオネタバレが一部含まれています。
未読の方はご注意ください。

※男性同士の過激な性行為や露出行為が大量に描写されているのでご注意ください。

18歳未満の方の閲覧は固くお断りいたします。

※筆者の考えた独自設定、考察がでてくるのでご注意ください。

※本作の内容、挿絵の転載・複製・再配布・転売等を禁じます。

夏も間近で生暖かい空気が汗を滲ませるパイス・ブランの公衆浴場の夜は長い。昼と夜は老若男女が他愛もない世間話をしながら湯浴みを楽しむ気軽な社交場だが、一層夜が深まり表向きは閉館されると浴槽から立ち昇る湯気以上に咽返る雄臭い熱気に包まれる雄欲塗れのハッテン場へと変貌する。

管理責任者であるロマネスの背徳的な我欲が最大限に発揮された最低限の秩序だけが保たれた無法地帯では、今宵も体型も年齢も種族も肩書も関係なしに肉棒を猛り勃たせた発情した雄共が大勢集う。湯船の中や外、サウナやマッサージュルームとあらゆる場所で公然と濡れた男体を結合させては興奮と悦楽の咆哮を反響させる。

湯水や汗で濡れ清めた肢体を唾液や精液、果ては小便で再び淫乱に汚す行為は、日常で倫理的で理論的な人間を演じながらも内心常に発情している雄獣たちの心身を大いに開放させる。

その噂を聞きつけてパイス・ブランの国外からも大勢の変態野郎共が深夜の公衆浴場に足を運び、己を時に着飾り誇張させ時に束縛し制限していた身分という枷を豪快に投げ捨て、一糸纏わぬ本来の姿を取り戻す。高貴な身分は下賤な身分の奴隷となり、気高き孤高の猛者は柔和で慈しみのある優男の赤ん坊になる等は日常茶飯事である。

「あつ！あつ！あつ！あああ……！も、もつと……もつと私を……俺を犯してくれ！虐めてくれ！訓練の比じゃない位に俺を……俺をおおお……っ♡」

「はっ！はっ！はっ！んおお……！ず、随分と派手に叫ぶじゃねーか！そんなに周りの連中に見られてーのか！？普段の真面目でインテリぶったカッコはどうした！？総司令やトルケルが見たら心底ドン引きすんだろぅなあ！バルト……お♡」

「は、ハロルドお……♡お前が一番知ってるだろ、本当の俺はインテリ軍人でも生真面目な教育係でもない……！ただ軍人のエロい筋肉とチンポに惹かれて軍学校に入学した、最低な変態野郎だったことをよお……♡」

「ああ……よく知ってるぜえ……！あの『ビバーク』の時から……いや、そういう気配は入学してから顔を見合わせた時からビンビン感じてたぜ。オレはお前と違って入学前からそーいう事が大好きで行きずりの野郎共とガンガン犯り合ってたからよお！」

「『ビバーク』の時まで黙ってたとは……意地汚いな、このヤリチン野郎め……♡さっさと誘ってくれば俺の童貞処女ももっと早く卒業できたのによお」

「おいおい、そりやお前もだろ？目覚めちまったら他のヤツにはバレたくないって毎日毎日オレに欲しがりがやって。偉くなっちまったらなで部下や敵の懐柔にチンポとケツマン使いまくりの雑食髭オヤジがお♡もう大浴場で何人と犯ったんだよ、バルト」

「ぞ、雑食髭オヤジはお前もだろうが、ハロルド……。俺がお前を欲しがっているのを知って、わざと他の野郎との交尾を見せつけやがって……！」

「ふーっ、ふーっ、ふーっ……。こんな大型ハッテン場じゃ見せつけセックスが華だろが。それに、エロい喘ぎ上げまくって周りの野郎共煽ってるお前が言えた義理じゃねーだ……ろおっ！」

「あづづ！？あおづあおづあおおあおんづ……。♡は、ハロルドお……。もつと、もつと奥まで……。腹ボコするまで俺を廻ってくれえ……。♡」

大浴場がよく見渡せるフロア中央に置かれたビーチチェアで二人はまぐわっていた。

野太く濁ったバルトの嬌声が一際大きく反響すると、その股間に重々しく起立した肉棒は血管を脈動させながら上下に暴れ、そのまま躊躇なく優秀なアズアテラ軍人の濃い精液を惜しげもなく噴出させた。

それは雪焼けか日焼けで褐色に焼けたハロルドの肌に良く映えて、嗅ぎ慣れた旧友の精液の青臭さに普段の冷静さを失うほどの興奮を覚える。ハロルドは目を見開いて涎が垂れる口で呼吸する余裕のない表情で激しく腰を打ち付ける。既に数多の肉棒をしゃぶり続けて原型の無くなったバルトの膣壁を自分の肉棒の形に戻して癒やそうとじつくりと舐り犯し、腸壁の締付けを取り戻させながら肉薔薇の咲いた雄膣へ肉棒の抽挿を繰り返す。

白い雪のようなバルトの肌は既に湯浴みと雄交尾による高揚で仄かに赤く染まっており、その傷が残りながらも緻密で美しく鍛えられた彫刻の如き肉体美が一層の艶かしさを放って一際ハロルドを誘い、滾らせる。任務も生存本能も関係なく、バルトへの親愛と一言で表現するには足りなすぎる重く深い愛情を一回一回の抽挿に込める。

雄交尾に最適化されたバルトの膣筒や前立腺を轢き潰し、肉弁を貫いて結腸まで亀頭を突き刺して内部を蹂躪するのは、ハロルドにとっては背德的でも蠱惑的でもない、只管に郷愁感と安堵感を伴って円滑に雄欲を暴走させてくれる。そして、軍の任務で廃れ気味な濃厚な愛欲を満たしてくれる唯一無二の存在でもある。

任務で使い込まれた歴戦の肉棒をバルトの中に挿入する度に、アズアテラ城砦総司令の片腕でもある高尚な軍人である姿を棄て、只旧友の肉棒で颯られ犯されて悦ぶ変態の隻眼の髭面の頬を愛おしげに撫でながら、柄にもなく唇を重ねて恍惚の吐息を吹きかけて素直な愛情を誇示したくなる。周囲の勃起した野次馬に『コイツは俺だけの物だ』と宣告するかのように。

しかし、バルトがハロルドへ求める重く深い愛欲はそれだけでは到底満足できない。バルトはハロルドの自分以上に傷だらけな上で毛深い、抱き抱かれ慣れた体に抱き着いてピシと伸びて強張っていた両足を巻き付ける。そして、ハロルドから重ねられた唇を覆い被せるように大口で咥え込み、舌で強引に唇をこじ開けて舌を絡ませ合うディープキスへと引き摺り込む。

冷静さの欠片もない野性味溢れる乱暴な蛇の如き巻き付き具合に唾液は自然と攪拌さ

れ、卑猥に粘着し合う水音を響かせて鼓膜を経由して頭蓋骨の中を蕩けさせる。そこに自分から腰を器用に動かして前立腺や結腸への肉棒突き刺しを懇願し、ハロルドの熱い雄欲を貪りたがる。

「んっ……はっ、はっ、はあっ……。こ、この欲しがり髭オヤジがよお……ケツマンの中が漸く……オレの形に戻ってきたみてえだな……♡さっきよりもキュンキュン締め付けてくらあ。愛しの部下や新人ちゃんにもこんな甘えん坊になってんのか？」

答えが分かりきった意地悪な問いをバルトの顔を舐めながら呟けば、普段は自分以外には決して見せないだろう雄々しく乱れた、だがどこか弱く儂げな表情を浮かべて微笑み返してくる。

この瞬間が堪らない。バルトが自分自身だけを凝視したまま、アズアテラ軍人から一人の雄狂い髭オヤジに戻った時にしか見せない姿を見る度に、ハロルドはバルトに胸をときめかせて肉体的快楽しか得られない任務や日頃の雄交尾とは異なる、弱点である本心を射抜かれたような被虐欲で興奮が青天井と化する。

「あっ、あっ、ああああっ……♡そ、そんな訳ないだろ……！こ、こんな酒に酔ったみてえな無防備な姿……部下や新人、総司令にも見せられねえよお……。んな事わざわざこんな時に訊くなよ、ハロルドの馬鹿野郎……」

「バーカ。こんな時だから訊くんだよ……んっ、ふっ……ふんっ！ふんっ！おらっ！うらあっ！」

「あっ♡あっ♡あああああ……♡す、好き……強いチンポ、好き……。ハロルドのチンポ、すきい……。♡俺の気持ちい場所、ぜんぶ慰めてくれる……。♡」

「当然だろ？バルト、お前と何年、何十年雄交尾しまくってると思ってたんだ？」

「あんっ、あんっ、あああんっ……♡そ、そんな昔のこと覚えてない……！ハロルドはずっと……俺にとってはハロルドだからあ……♡」

「ふっ、ふっ、ぐううう……♡う、嘘つけ。どうせ『ビバーク』ん時のこと思い出してるんだろ？オレがお前の処女童貞を奪ってやった、あの寒くて硬くて暗い大雪の洞窟の中でそのことをよお」

ハロルドが快楽で表情を蕩けさせながらも、必死に余裕打った笑顔を浮かべて指摘すると、バルトは頬を赤らめて視線を露骨に逸らす。まるで新人軍人のような初々しさすら感じる露骨な肯定で、普段の理知的かつ冷徹な振る舞いとギャップで思わず嘖き出してしまふ。

「わ、笑うな！俺にとって……あの『ビバーク』は間違いなく人生の転機だったんだ。軍人としても、一人の男としても……お前の相棒としても……♡」

その初々しい髭オヤジの羞恥顔に、ハロルドの加虐欲が一気に昂り爆発する。余計なことなど全て忘れて目の前のバルトの肉体に集中し、今度はこちらから影シイデープキスを押し付けながら腰を全力で前後に動かす。

痛いほどに猛り勃った肉棒で硬い前立腺や狭まった肉弁、柔らかくうねる結腸を激しく抜き廻りように抽挿を繰り返し、結合部から二人の愛の結晶たる大量の泡立った愛液を噴出させる。激しい雄交尾でバルトの尻を鼠径部で激しく叩いて甲高い炸裂音を高速で響かせ続けて、途切れないバルトの嬌声に併せて大浴場中に響かせる。



「あぐっ！？あああっ……！あっ♡あっ♡あっ♡♡♡ヒヤ、ヒヤロルド……そこっ、そこおっ！そこもっと強く、もっと激しく犯してくれえ！しゃ、射精止まらないっ、お前のチンポで射精止まらないの気持ち良いぞっ♡ケツマンの奥ジンジン感じるの……あああっ♡最高に……気持ち良いぞっ！だ、だから早く……早く俺の中に……♡」

「はあっ！はあっ！はあっ！わあってるよバルト！お前のケツマン、漸くオレのチンポの形に戻せたんだ……思う存分中に出してやるぜ！お前の大好物の……オレ特製の特濃ドロロザーメンをなあ！ケツ締めて漏らすんじゃねえぞ、バルトお！」

「ハロルドっ、ハロルドっ、嗚呼っ！ハロルドおおおお……っ♡」

全身傷だらけの筋骨隆々な髭面の見知らぬ壮年の番による豪快な雄狂い交尾に、大浴場で盛り合っていた他の雄共も興味津々で凝視しては、自分たちも自慰や肛門自慰、雄交尾の糧にして一層濃い雄臭い熱気で浴槽の湯気を押し退ける。

そして、処女の如きか弱い表情で喘ぎ悦ぶバルトの顔を凝視し舐め、ディープキスをするながら肉棒の抽挿を繰り返したハロルドは、自身の絶頂を察してバルトの両足を抱え込んで引き寄せてから肉棒を根本まで深々と突き刺した。

「い、逝くぜ……バルトお……！愛してんぜ、相棒お……♡」

「ああんっ♡あっ！あっ！ああおおっ♡お、オレ、も……ハロルドお……♡」

互いに名前を呼び合って視線を合わせてからディープキスで舌を絡ませると、同時にハロルドの肉棒から大量の精液がバルトの雄膣に噴出された。

既に大浴場で何人も相手をして種付けした時の上澄みではなく、睾丸の底に溜まっていた濃厚で雄臭い精液を快楽に押し流されるまま躊躇なくバルトの中に注ぎ込んで、大量に精子を孕ませようとする。

「あっ！？ああっ！？ああああああっ♡ハロルドっ、ハロルドハロルドはるるどおっ♡キタツ……お前のザーメン、俺の中にドクドク入ってきて……ああああっ♡♡♡奥までっ、奥まで注いではらませてくれっ♡お前のザーメンもっともっと欲しい……！もっと、もっとどおおおおっ♡♡♡」

「はっ！はっ！はっ！へへへっ、うっせーよ。言われなくても全部注いでやらあ！」

激流となつて流れ込む精液の刺激で大いに脈打つ粘膜が、竿を強く締め上げて搾精を促進し、何度も何度も射精を強要され、その度に悦びながら中出しを繰り返す。その度に情けなくも雄々しい軍人としてではない、ハロルドという一人の男として邪のない感情を伴った嬌声を漏らされてしまう。

湯船から上がった直後よりも濡れて全身から熱気を上げる中、目蓋から流れる汗を拭う暇もなくチラリと周囲を見渡せば、自分がバルトを激しく犯している淫獣の如き暴れぶりを凝視している大勢の観客共が湯気の向こうに見えた。

見られるのは嫌いじゃない。寧ろ、誰にも見られず秘密裏に遂行する諜報員としての任務では決して得られない露出欲を満たされ、何より肩書も立場も関係なしにバルトへの独占欲を強く誇示できるのが最高に嬉しい。

「はーっ、はーっ、はーっ……。そ、そろそろオレのチンポも我慢の限界だぜ。もっとケツマン締めてもっともって搾り呑めよバルト。……。オレのこと、好きなんだろ？その自慢の口髭が生える前から大好きなんだろ？ああん？」

「あっ……。ああ……。あんっ♡す、好き、だ……。ハロルドお、誰より……。もお……。♡」

「へへへっ、奇遇だな。オレもだ♡……。オレの子種、もっと孕めよ！バルト……。っ！」

短く相思相愛の再確認を終えると、ハロルドは濡れた髪をボサボサに振り乱しながら全身全霊を込めて、限界まで膨張した肉棒で膣壁を押し拡げながらバルトの雄膣の最奥を高速で連続刺突で攻め立てる。それから腰で円を描くように動かしながら下半身を持ち上げて蟹股になり、腹にまで精液を流し込みつつ種付けプレスの体位で前立腺や結腸をしつかり廻り潰し、そして貫く。

体内で互いの汁を絡ませ攪拌するように肉棒を動かして睾丸を大きく揺らしながら雄々しい熱を帯びた子種をしつかり結腸の粘膜に着床させる。気付けば、無防備になったハロルドの毛深い雄膣までもがヒクヒク疼いて濡れ始めている。

そして、力を振り絞って限界まで竿をねじ込んだ瞬間に覆い被さった腕の下で、熱い子種を追加で注がれて激しく粘膜を凌辱されながら無防備過ぎる恍惚の笑顔を浮かべるバルトの多幸感に溢れた淫靡な笑顔を見下ろす。

こんな犯され上手な淫乱筋肉なくせに、アズアテラでは男の中の男、真のバリタチの雰囲気醸し出しているのが可笑しく思わず力なく釣られて笑ってしまう。

「あっ♡ああっ♡んああああ…っ♡すごい、俺の中に溜まってきてるぞ…ああ、
久々だな、ハロルドの精液でこんなに腹が満たされるのは…♡」

「はあっ、はあっ、はあっ…♡オレも久々だったぜ…バルトのエロ顔間近で見ながら
中出ししたのはよお…♡いつも偉ぶったバリタチ仕草で中々ガチで孕ませてクレなかつ
たしよお。城砦でじっくり二人でやんの良いけどよ、やっぱ…ハッテン場で派手に狂
ってハメ合うのも最高だよなあ♡」

「あっ、あんっ、あああ…♡ま、全くだ。軍人の『私』ではなくて、単なる一個人の
『俺』が公然とお前に犯されてケツマンにザーメンまで注がれるなんて…なかなか無い
経験で興奮したよ…♡」

互いに大口を拡げて舌を伸ばし、舌先で繋がる涎の糸が伸びるのを嬉しそうに見なが
ら、糸が途切れそうに再びディーブキスで互いの口腔を舐り啜り合い、再び舌先を最後に
離して涎の糸を伸ばす…。

そんな他愛もない無意味だが淫靡な行為に夢中になるほど、今の二人は心身共に満足し
ていた。バルトが愛おしげに精液で膨張した腹部を撫でながらハロルドを見上げ、まるで
二人の愛の結晶が妊娠したような気恥ずかしさを見せる。

「もしも、俺でも…男でも妊娠できるレリックがあれば、お前との子を…」

「…欲しいのか？」

ハロルドが腰をゆっくりと動かしながら問いかける。その表情は真剣そのものだった。

「まさか。妊娠すれば総司令の下で働け無くなるどころか、軍を除隊することになる。そんな平和で安穩とした生き方は『俺』……『私』には似合わないさ。君とともに命をかけてアズアテラに殉じる生き方しか『私』は知らないからな。初心な『俺』だった『私』はもう遙か昔に置き忘れてしまったよ。……ハロルド、君の前以外では」

「……そうか。ま、そうだよな。お前は昔からそういう奴だったもんな。作戦でも任務でも……軍学校の講義でも、生真面目で冷静で大人しそうな癖に……ギリギリを攻めようとエグいやり方してたもんな」

バルトの言葉を聞いて、ハロルドはゆっくりと腰を引いて雄腔から肉棒を引き抜いて勢いよく反り勃たせる。

同時に、バルトの雄腔からは大量の精液が滝のように一気に溢れて大浴場の床までドロドロに汚していく。愛する相棒の遺伝子が含まれた子種を一気に排泄する事に名残惜しさがあるのには間違いないが、雄でありアズアテラの軍人である以上は単なる紐帯を強める儀式の残滓に過ぎない。

それでも、思わず腕を伸ばして掌で掬い取って、大きく開いた口から限界まで伸ばした舌でべろりと舐めてその雄臭い苦さを味わうのは止められない。その雄の苦さや臭みこそが、時に生への執着を上限まで増幅させる糧となるのだから。

「妊娠の時間終わりーっと。……はあ、はあ、はあ……ふーっ……♡想像以上に全力で犯っちまったぜ。バルト、お前がそんな素を見せてオレを煽るからだぞ」

すっかり精液を排泄して元のシックスパックに割れた分厚い腹筋に戻った腹を擦りながら、バルトはハロルドの腕の下で疲弊した笑顔を浮かべる。城砦で見せる儀礼的な笑顔ではなく、白い歯を見せた無邪気な笑顔だった。

「折角総司令から久々の休暇を二人一緒に頂いたんだ。国外ならどんなに羽目を外してエロくなっても問題ないだろ？ましてや、パイス・ブランの深夜の大浴場ならな」

アズアテラ城砦の迷宮の最奥で繰り広げられた『ネズミ』や『怠惰の魔王』との死闘、そしてクリスマスに発生した雪兎族との小競り合いを無事解決して城砦の不安材料は一気に解消された。

そして、初夏と言っても今年のアズアテラには珍しく雪が少なく、資材や物資の調達に走り回る必要もない。『方舟』で竜王と番が世界に混沌を氾濫させた影響なのだろうか。

「そんな時こそ若手の鍛錬には丁度よい。トルケルやスヴェンが上に立つ者として十分に成長し、そろそろ若手の幹部登用や諜報員の追加も考えた方がよいだろう……と、総司令からの伝達だったな」

「オレたちもそろそろ雄交尾大好きな後期高齢絶倫オジサンだからな。若手にも頑張つて貰わないと体が悲鳴を上げちまうぜー」

「おいおい、髭を生やしているがお互いそんな年齢でもないだろう」

「それもそう。ま、若手の尻拭いで任務するのも楽しいが、そろそろ成長の時期ってやつだ。自分のことは自分で蹴りつけないとプロとは言えねえからな」

ハロルドはそう言いながら、バルトの体を覆う姿勢から横に倒れて肩を寄せ合って仰向けに倒れた。汗塗れで火照った全身から大量の熱気を立ち上げながら、勃起した肉棒から未だに精液の残滓をシックスパックの腹筋にトロトロと漏らし続けている。

すると、バルトが手を握ってきた。指を交互に交差させた所謂『恋人繋ぎ』で互いの体温を感じ合うと、ゆっくりと体を横に滑らせて肩をピッタリと触れ合わせる。

「おいおい、また欲しいのか？次は……第何回戦だっけ、忘れちゃった」

「流石にスタミナが足りないな。若い頃に比べて性欲の回復に肉体と体力の回復が追いつかないな。全く、我ながら随分と絶倫な髭オヤジになったものだ」

バルトが自分の顔の半分近くを覆う自慢の口髭を触りながら、自嘲気味に笑う。

それを隣で見ていたハロルドも、釣られるままに自分の口髭を触ってしまう。

「軍学校の時はどっちも生やしてなかったのに、今じゃオレもお前も髭オヤジとして皆に認知されちゃったな」

「軍学校の生徒が髭を生やすのは禁止されていたからな。あの頃は俺もお前もまだまだ可愛らしい若造だったな」

「うおー懐かしー。ま、オレはフリーダムに動いて教官の指導もサラッと躲して、お前は規律一番の優等生だったけどな。思えばどうしてこんなにズブズブでラヴラヴな関係になっちゃったんだろぅなあ」

ハロルドの挑発するような言葉に、バルトは若干頬を染めながらも冷静に返す。

「……あの『ビバーク』が、俺たち二人の全てを変えてしまったな。……あの時は死を覚悟したが、今となってはお前とこうした関係を築けた切欠として良い思い出。……いや、軍人として悪い思い出であり教訓となる体験だったが……」

「そーいう細かい事は良いんだよ。結果良ければ全て良しなんだから、オレ達軍人は。……今日のお前との交尾、あの時を思い出すくらいには気持ち良かったぜ」

「同意だな。あの時の『俺』に未来の顛末を話したら絶対に信じられないだろうな。『普段は全く口を利かなかった相手に童貞処女を奪われる』だなんて」

「しかも『猛吹雪の雪中行軍訓練で遭難した時に』だもんな。オレだってぜってー信じねえわ」

二人して若き頃の最悪で最高な記憶を思い出しながら、繋いでいた指に力を入れて互いの指を絡ませ合う。『あの時』とは違って豪勢で温かい大浴場でまったりと過ごしつつ、簡素で極寒な洞穴で絶望の中過ごした若き軍学生だった日の事を。

「そう、あれは確か愚鈍な教官が年に数度の猛吹雪の中で、まだまだ素人臭が取れない軍学生の雪中行軍訓練を強行したのが始まりだったな」

「ほんとあの教官は馬鹿野郎だったな。ま、そんな馬鹿野郎の指示にまんまと従ったオレたち素人軍学生も悪かったんだがなー」

「ああ、それで……むう、少し眠気が……流石にやり過ぎたか」

「ま、閉館までまだまだ時間余裕だしまったり過ごそうぜ、思い出話でもしながらよお」

「それもそうだな。……途中で寝ちまったら悪いな」

「ふわぁー……。だいじょーぶ、オレもそろそろ眠気限界っぽいわ……。」

二人の記憶の中でその時の出来事が徐々に鮮明に浮かんてくる。

同時に、激しい雄交尾を終えた達成感と安堵感からか、そのまま目蓋が重くなり徐々に心地よい眠気が二人を包みこんでいく。互いの温かく、数々の任務で荒れて節くれ立った軍人の手を握り合ったまま……。

俺はここで死ぬんだ。

軍人となって立身出世どころか軍学校すら卒業できずに、白い雪の下に埋もれて人生を終えるんだ。

全てが荒々しい白の世界に囚われた危機的状況下で、若き軍学校の生徒・バルトは確信していた。真正面から吹雪いてくる猛烈な白い嵐は雪眼防止のゴーグルを瞬く間に氷の結晶で氷結させ、何度手袋で拭いてもすぐに視界を見渡す限りの白から周囲を阻む奪う黒へと塗り替える。

風に背を向け懷から羊皮紙の地図と方位磁石を取り出し何とか現在位置を把握しようとするが、震える手が磁石の針を常に揺らし横風が地図を吹き飛ばそうと邪魔をするのでまともに読むことすらできない。

「無駄だ。このホワイトアウトじゃ地図も磁石も役に立たねえ、さっさとしまつてきびきび歩くぞ。オレの記憶が確かなら本隊からはぐれたのが『ポイントC』付近。北東に進めば丁度北からの風を遮る斜面があるはず。その麓でビバーク場所を探すぞ」

『ビバーク』とは、野外での活動中に天候の悪化や肉体の損傷で動けなくなった場合に、行方不明である。物資の中にもビバーク用の小さいサイズのテントが収納されている。

「……俺は反対だ。磁石で方角だけ分かっても正確な位置は把握できていない。ここで緊急用テントを張ってビバークをした方が良い。これ以上の体力の消耗は危険だ」

バルトは背負った軍兵専用の革鞆を下ろそうとするが、あまりの吹雪の強さにバランスを崩して分厚い雪の中に倒れ込んでしまう。降り積もったばかりの新雪はバルトの鍛えた肉体と大量の物資が入った鞆を瞬く間に沈めていき、そのまま吹雪で覆い潰しては体力を消耗させて永遠の眠りへと誘ってくる。

「おい、しっかりしろバルト！こんな遮蔽物も無え場所で荷物広げるなんて無茶だ。物資が吹き飛んじまったらそれこそアウトだ。アズアテラ中を這いずり回って野郎共相手に

『売春』しまくって軍学校の学費稼いできたオレの本能と勘を信じろ」

「ぐうう……そんな自慢げに汚い言葉を吐くんじゃない！……ああもう五月蠅え！分かっ
たよ！歩けば良いんだろ歩けば！畜生、こんな……こんな筈じゃなかった筈だろ？この時
期は吹雪も少なくて適度に歩きやすい、雪中行軍日和じゃなかったのか……？」

「大声出すな、口が雪で詰まるぞ。ったく……だからオレはあの馬鹿教官が嫌いだったんだよ！何でもかんでも教科書教科書言いやがって、いざ実地訓練を率いたと思ったらこの
ザマだ！生きて帰ったらあのガチムチなケツ、ガバガバになるまで犯してやらあ……！」
唯一はぐれなかった同級生が口汚い恨み節を呟きながらも、倒れたバルトの腕を引っ張り
体勢を立て直してくれる。そして、腰紐がしっかりと結ばれているのを確認するとバル
トを先導するように力強い足取りで吹雪に立ち向かっていく。

手渡された周辺地図と行軍予定図を丸暗記していたバルトでさえ途方に暮れ、半ば諦めている状況でも、この傍若無人で飄々とした性格の同級生は一切の迷いなく己の信じた道へと進み続け、分厚く積もった雪に喧嘩をするように巨大な轍を残していく。

生真面目で規律に厳しく、それでいて筆記の成績は優秀であるバルトとは何もかも正反対なこの同級生とは今回始めてバディを組んだ。日々の厳しい軍学校の生活の中で退学脱走、そして殉職する生徒が少なくない中、その物怖じしないのらりくらりとしたダウナー氣質の緩い性格と粘土のように柔軟な対応力で軍学校の生活に馴染んでいた。

時に教官の目を盗み規律を破っては自室や物置で他の生徒や意地汚い教官相手に『雄欲発散』をしては人脈を広げる手腕に眉をひそめることもあり、バルト自身はできるだけ拘らないようにしてきた苦手な人種でもある。

そんなまともに口も聞いたこともない相手とバディを組んだ矢先に『これ』である。教科書や必要資料を全て丸暗記し自信満々で挑んだ雪中行軍はものの見事に大失敗し、軟派な同級生の勘一つで歩き続けなければならぬ。

悔しい。憎い。そして恥ずかしい。

意気揚々と教科書や地図を何度も読んで教官に質問し仲の良い同級生と意見を交換していたのが馬鹿みたいではないか。成績トップとして内心誇りにしていた軍学校の優等生というプライドが吹雪とともに吹き飛んで、今や道に迷って死神の鎌に怯えて今にも泣きそうな無能ではないか。

今日の前で自分に活を入れている雄狂いのダウンー野郎の方が、今や自分よりも数倍頼りになる本物の軍人のようだ。自分を守るように前方を歩き吹雪から守ってくれている背中は、教室で見るとしょぼくれた猫背とは違う頑健で頼れる強い男の背中に見えた。

今はそんな同級生を信じるしか無い。バルトはゴーグルの中で溢れそうになる悔し涙を必死に我慢しながら前進し、少しでも同級生に負けないようにと意地になって大股で進んで歩幅を合わせる。

「おい、無理すんなよ。斜面の麓まで歩く体力は残しておけよ、無理して空元気出すんじゃないぞ」

「空元気じゃない。歴とした学年トップとしての自信から溢れた力強い歩きだ。俺の本気が教室の中じゃないって事、今見せてやるからな。この変態野郎め」

「へいへい、オレはチンポとケツマン大好きな変態ですよーだ。ふん、どーせ教室での勉強が役に立たなくて悔しいんだろ？オレみたいに肌と肌を合わせて得られる知識も軍では必要だぜ」

「そ、それは……その時になったら、勉強始めるから良いんだよ……って、いきなり止まってどうした。まさか……」

「……はあー、その『まさか』さ。雄交尾行脚してよかったー」

突然止まった同級生が安堵したように膝に手を載せて中腰になると、バルトの目の前にも『それ』は現れた。

「……洞穴だ。本当に着いたのか……」

「あー確かここで夏に木こりのバイトしながら雇い主のおっさんたちと乱交しまくって駄賃弾んでもらったんだよなー、懐かしい」

強烈な北風を遮るように立ち塞がった小高い丘陵が目の前に出現し、その麓には分厚い雪越しにも浮かび上がる岩石群が立ち並んでいた。

そして、その岩石群に隠れるようにその洞穴は丘陵の麓にポツカリと空いていた。吹き返しの風が中に流れ込んでくるが猛烈な吹雪からは完全に遮られており、一歩中に足を踏み込めば硬く湿った土が下肢を強く支えてくれ、何度か強く足踏みをすれば雪の塊と化した足から雪が剥がれ落ち、靴紐が固まりぐつしよりと中まで濡れてしまった軍靴へと戻してくれる。

「お邪魔しますよーって、誰もいねえか。奥に夏の間に切り落として保管してある木材や薪が保管してある、それを使って焚き火起こしてさっさと服乾かそーぜ、バルト」

「ちょ、ちょっと待て。焚き火は重要だが入口付近で火を起こした方が良さぞ。奥で焚き火を起こしたら燃焼で酸素が消化されて酸欠に……」

バルトが起こした異議を遮るように、洞穴の奥から一陣の強い風が吹き込んでくる。雪は纏っていないが、冷たく湿った風は全身雪だらけの疲弊した体を押し倒そうとする。

「奥にちっさい空気穴開けてあんだよ。そうしねえと木材が腐食しちまうし、何よりそうじゃなきゃ大人数で乱交なんかできねえからな」

「……………。そ、そうか……お前は何でも知ってるんだな。俺なんかより、お前は本当に優秀だったんだな」

「んだよ、またオレに手柄取られてショックなのか？オレにキレるのは勝手だけどよ、だからって自分のこと卑下すんのは止めろ。見てるこっちまで気分悪くなるぜ。折角無事にビバークできるんだ、今はそれに喜んで奥でじっくりねっとり休もうじゃねえか！」

軽くジャンプしてから両腕で全身の雪を払い、被っていたフードとゴーグルを外して眉毛の生えていない若干強面の顔を晒し、ずぶ濡れの銀髪を掻き上げて水色の瞳でバルトを見ながら、教室でも良く見る若干怪しいニンマリとした笑顔を浮かべる。

だが、今はその笑顔に心底安堵して、バルともフードとゴーグルを外して碧い瞳で見返して気恥ずかしそうにぎこちない笑顔を浮かべて同級生に礼を告げる。

「ありがとう、ハロルド。お前のせいで助かったよ」

「へへっ、どういたしまして」

そこからの行動は早かった。焚き火に必要な薪は現地で、火種は物資の防水マツチで、火種は引き裂いた適当なタオルを使い、教科書通りの適切な手順でバルトが手早く大きな炎に燃え盛らせた。

底の深いコッヘル二つに掬った雪を焚き火で溶かして沸騰させ、物資に含まれていた眠気覚まし兼疲労回復用のコーヒーパウダーを入れて熱々のコーヒーを二人分準備する。砂糖は無いので、栄養だけはある不味いレーションを腹に流し込むには丁度よい苦さだ。

ハロルドはその間、壁にロープを張って雪で濡れた防寒具や制服、ズボンや靴下や軍靴を手際よく干していく。凝視されながらの脱衣で恥ずかしさに負けそうになりながらもハロルドの目の前で一枚一枚装備を脱いでいく最中、何でロープを掛ける金具まで準備されているんだと訊くと、乱交の時に汚れた服を洗って乾かすために頻繁にロープを張ったと返答された。

「いやー、あん時は汗塗れの着衣プレイで脳天からザーメンぶっかけられて暫く服が雄臭くて困っちゃったなー。ケツも暫くジンジン疼きまくって、折角稼いだ金でデイルド買ってアナニーにハマってたなー」

「そ、そうか。ハニートラブの教科書は読んで一通りの雄交尾に関しては暗記したが、想像以上に男同士の性行為は大変なんだな……」

言葉に詰まり苦笑いで返して深くは追求しなかった。

気付けば、時折強く吹き抜ける風の中、焚き火で十分に温まった洞穴の奥で薄い下着一枚になってリラックスして、美味くないレーションを熱々のコーヒーで流し込めるまでに環境は改善した……とバルトは安堵していた。

だが、ハロルドにはまだ最後にやることがあった。物資の中から薄手で硬い毛布を取り出してバルトに投げつけると、そのまま包まろうとするバルトを声で遮った。

「なんだハロルド、早くしないとコーヒーが冷めるぞ」

「その前にまだ乾かしてねえモンあるだろ。ほれ、パンツ脱いで」

そのド直球な言葉に、バルトは首の筋を痛めそうな勢いで振り返る。ハロルドを見る顔は雪焼けとは異なる、困惑と羞恥によって紅潮していた。

「なーにパンツ一丁で過ごそうと思ってるんだよ。大事な大事なチンポを守ってくれるパンツこそ乾かさねーといけねーだろ。ほら、早く脱いでオレに渡せ、干してやるから」

「そ、それはそうだけど……」

「あん？まさか男同士でチンポ見せつけ合って恥ずかしー♡……とか思っていないだろうな？さっさと焚き火でパンツとチンポ同時に乾かさねえと、チンポが凍って壊死しちゃうぞー」

「ば、馬鹿野郎！俺だってそんな初心じゃないぞ！そ、それにそんなすぐに陰茎が凍る訳……って、おい、な、何でそんな目をしてこっちに來るんだ？」

「へっへっへ……パンツを自分で脱げない優等生ちゃん相手には……ちょーつと強引にいかせてもらうぜ」

ニヤニヤと小馬鹿にするような笑顔を浮かべながら全裸のハロルドが近付いてくる。毛布も羽織らずに胸毛や腕毛、そして陰毛生い茂る筋骨隆々な肉体美を堂々と露出しながら股間に重くぶら下がる肉棒を見せつけてくる。

そして、毛布を羽織ったまま背中を向いて隠れるように下着を脱ごうとするバルトの前に素早く回り込んで、足元に膝をついて勢いよくバルトの下着を脛近くまで引き下ろして冷えたままの股間を露にさせる。

「あっ！？ちょ……は、ハロルド！この変態、野郎めえ……っ」

「へっへっへ、隙ありだぜー。……おおー、エグい角度のハイレグ履いてる上に、すっげえデケエ逸物持ってるんじゃないかねえか♡雄交尾のプロの俺でもケツマン疼いちまう位えにはエッロイ色形してるねえ……その真面目面でどんだけ種付けしまくったんだよ、バルト」

堅物な性格のバルトが履いているとは思えないほど際どい角度で股間の膨らみを隠している小さいハイレグ下着を勢いよく垂直に脱がすと、生ぬるく湿った青臭い熱気とともに勢いよくバルトの肉棒が姿を現した。

几帳面に整えられている陰毛の中から重量感たっぷりに垂れる肉棒は、萎えた状態でも並の雄の手首ほどの太さを誇り、隠してきた性欲の強さで毎日毎日何回も行ってきた手淫によって黒く変色して焚き火で生々しく照らし出されていた。

太い竿で支える亀頭も重量感たっぷりの巨大さで、鋭い雁首を剥き出しにしたまま艶やかに磨かれている表面の鮮やかな桃色は使い込まれた竿とのギャップを生じさせる。

太い竿に潰されて隠れた睾丸も、左右から内腿に強く圧迫されている程の巨大さでぶら下がっており、全裸歩行をすれば間違いなく内腿と衝突する肉音が響くだろう。

「た、種付け……！！？馬鹿！変態！淫乱！そ、そそそんな事……軍学校で学ぶ前にやることじゃないだろ！そ、そういうのはキチンと教官の指示に従って、適切な相手と丁寧に行わなければ……！」

顔を真赤にして顔を毛布で隠してしまったバルトの言葉に、思わずハロルドが笑う。

「ってことはバルト、お前……童貞かよ」

「！！！！？？？ど、どどどど……童貞だと！？俺を愚弄するのも良い加減にしろ！部屋にダンディな髭面紳士のエロ本だつて隠してあるし、秘密の盛り場に通つて物陰からお前たちの乱交見ながらチンポもケツも弄つてるし、そ、それに……」

「つまり他の野郎と直接触れ合つてエッチしたことねーんだろ？それを童貞つて言うんだよ。ついでに処女とも言う」

「……………ど、どどど……」

「あん！？」

全身を小刻みに震わせ始めたバルトが、顔を隠していた毛布を外して本気の怒り顔でハロルドに大声を張り上げる。……凶星を突かれて涙目になりながら。

「童貞で何が悪いっ！処女で何が悪いっ！軍学校の奴らが皆絶倫変態の雄狂い野郎ばっかなのが悪いんだ！俺だつて……俺だつて髭の似合うダンディな教官に優しく抱かれて童貞も処女も卒業したかった！なのにどいつもこいつも我先に盛り合いやがつて……！とっくにあんなエロい空間にされた秘密の盛り場に今更一人で行けるわけ無いだろうがぁ！」

「へえ……じゃあ右手だけでこんなにズル剥けデカチンポになったと。そんなにオレたちに混ざりたいなら堂々と真顔でチンポ勃起させて待ってりゃ、絶対に誰かがリードしてくれるのによ。バルト、お前みたいな生真面目優等生クンをメチャクチャ犯して墮としたいヤツは、同じ組のダチ以外にも上級生や教官にも大勢いるんだぜ」

「う、五月蠅いっ！い、今更そんなこと言ったって……虚しいだけだろ……！そ、それにそんなにオレのチンポ見るな変態！そんな見られたら……ああもう！ホラッ、さっさと下着持って干しといってくれ！もう用は済んだだろ！」

裸に引っかけたハイレグ下着を蹴るように脱ぎ捨てながら、バルトは焚き火の前で毛布に包まって熱々のコーヒを一気に飲み干した。自棄酒のつもりなのだろうが、想像以上に沸騰したコーヒの熱さに思わず咳き込んでしまう。

「ったく、性癖拗らせた大人ほど見苦しいもんは無ーぞー。さっさと本性開放して楽しく過ごしまえ。……こんなエロいハイレグ履く前によ」

半ば呆れた様子のハロルドは、バルトの脱ぎたてハイレグ下着の臭いを嗅いでニヤニヤ笑いながら、自分もさっさとボロボロのブリーフパンツを脱いでロープに引っ掛ける。

肩に毛布を載せてバルトの横に腰を下ろすと、既に準備されていた熱々のコーヒをゆっくりと喉に流し込んで吹雪で凍死寸前だった体を温かく癒やしていく。

膝を抱えて完全に体を毛布で隠すバルトと違い、ハロルドは肩に毛布をかけて地肌に焚き火の熱気を浴びるように胡座をかい股間を完全に露出させている。

揺らめく炎に照らし出されたハロルドの裸体は逞しく鍛えられた上に毛深く、股間の陰毛がへそまで続いて生い茂っている。肉棒と睾丸もバルト同様の太さと長さを誇る立派な巨大さで、絡む太い血管と大きく熟れて実った龟头はバルト以上に黒光りして、組んだ足の上で萎えた状態のままでも圧倒的な重量感を放っている。

「どうだ？どーせ他人のチンポをまじまじ見るなんて初めてなんだろう？風呂の時間も短けえし、ルームメイトとの見せ合いオナニーにも混じってねえんだろし。どうだ、オレの自慢のチンポは？お前の愛読書に載ってる好みの髭面紳士さんのと比べてどう思う？」

「……………す、凄く、太くて長くて大きくて…………え、エロいと…………思う。べ、別に見た感想を正直に言ってるだけだから！勘違いをするな！」

すっかり自分のペースを崩されて内面を暴かれてしまったバルトの拗ねた姿に思わず笑ってしまふハロルド。ただ単に雄交尾をしつつも波風立てずに付き合う大人ぶった同級生や教官とは違う、独特の魅力をバルトの中に見出し始めていた。

「へいへい。…………それはそうと、んなに丸くなってもっと焚き火に体を晒せよ。折角直火で暖まれるのに毛布に包まってるだけじゃ勿体ないぜ。…………さっきはチンポ見て悪かった、今度はそんなに見ねえからもっと暖まれよ」

「……………。俺こそ、さっきはムキになって悪かった。バディ同士、健全な裸の付き合いも必要だな。…………まだ、少し恥ずかしいけどな」

「今のお前はそれで良いんだよ。…………そんな感情、ハニトラの講義を受けたらすっかり忘れちゃうんだろうから。ま、オレは成人した瞬間に忘れちゃったかもしれないけどな」

「…………そうか。ハニトララブの講義の予習と思えば…………こんな事大した事ないな。二人で一緒に生きて学校に戻って…………一緒に教官に叱られて、一緒にクラスの皆に馬鹿にされて…………い、一緒にハニトラの講義を…………」

自分に言い聞かせるように呟きながら、バルトは漸く全身から力を抜いてハロルドとは反対側の片足を立てて腰を下ろし、ハロルドと同じように裸体を焚き火の前に晒す。萎えた肉棒は火種が生まれて熱を帯び始めた竿を冷ますように硬い地面に垂らし、巨大な睾丸を潰れた巾着のように拡げる。

極寒のアズアテラの大地で鍛え上げられた無駄のない筋肉の凹凸が揺らめく炎に合わせ、陰影を生み出し、自然と二人の軍人の卵としての雄々しさをフェロモンのように滲み出させる。黙々と飲み続けるコーヒーの熱とカフェインが徐々に全身に浸透し、精子に直面した緊張と恐怖から二人を解放してくれた。

だからこそ極限の恐怖と死の危険を察知した肉体は、その隙を狙って雄としての『生存本能』が活性化したのかもしれない。

「ふうー……、コーヒーが身に沁みる。味も香りもないレーションがこれほど美味く感じられたのは初めてだ」

「そうだな。……なあ、バルト」

「何だハロルド」

「見て見て。オレ、勃っちゃった」

一瞬意味が分からず訝しげな表情で視線を向けるバルトによく見えるように、ハロルドは胡座を解いて大きく股間を広げて座ったままバルトに体の正面を向ける。その表情は言動とは裏腹に至極真面目に物事を考える時のそれであった。

ハロルドの濃く茂る陰毛の中から力強く天を目指するように、肉棒は焚き火の炎に照らされて勃起していた。膨張した海綿体に大量の血液を運ぶ血管も立体的に盛り上がって竿の周囲に生々しく絡み付いては、重く吊り下がった睾丸を悠々と持ち上げる程の急角度で反り上げさせて抑え切れない雄欲を滾らせていた。

裏筋越しに太く盛り上がった尿道を昇り、大きく開いた鈴口から溢れ出る我慢汁が糸を引いて剥き出しの地面に滴る。硬い地面に吸収されずに溜まっていく透明な粘液の塊は、煌々と燃え続ける焚き火の揺らめきに艶めかしく照らされてそれ自体が灰かに明滅しているように見えた。

「お、おいっ！いい、いいいきなり何見せるんだ！ビックリするじゃないか。俺達は子どもじゃないんだぞ、こんな状況で勃起したからなんだって言うんだ」

「そうだ、オレたちはもうガキンチョじゃねえし、遭難して今死んでもおかしくない状況だ。だったら男同士でやる事は……分かるよな？」

ハロルドは羽織っていた毛布を脱いでバルトの前に立ち上がると、勃起して我慢汁まみれに濡れた肉棒をバルトの顔に近付ける。煤の臭いと共に広がる焚き火の強い熱気とは異なる、雄欲を滾らせる青臭い男体の熱気が顔全体を包み込む。

「バルト。お前いつもいつもオレたちがオナニーし合ったり乱交してる時に覗いてたよな？喜べ、お前がチンポ勃起させるほど欲しかった他人のチンポが目のあるんだぞ。……子どもじゃねえなら、ナニするか分かってんよなあ……」

バルトは、ハロルドの普段は見せない迫力のある雄々しい軍人的態度に怯み、まるで自分を支配しようとするアルファ的存在に身震いする。困惑や恐怖以上に、これまで飢えていた雄欲に強引に支配される被虐的興奮に。

生唾を呑み込んで目前で脈打ち続ける巨根に視線が釘付けとなり、嘔き出る我慢汁が顔面にも飛び散り一層濃ゆい雄の臭いに心臓が破裂しそうな興奮を覚える。

「ま、待て。早まるなハロルド。そ、それは只の生理現象で……『吊り橋効果』という状態だ。遭難した恐怖や不安を性欲や愛情と脳が勘違いしているだけだ。そ、それにだな、極限状態で子孫を残さないと行けないという男としての生存本能も……」

「うるせー、そんな事分かってんよ。……オレだってメチャクチャ怖えし不安だし寂しい。ここに避難できても無事に学校まで帰れるのか、また学食で大盛り定食腹いっぱい食えるのか、ルームメイトの奴らとまた部屋で乱交できるのか……考えれば考えるほど気が滅入っちゃう」

ハロルドは神妙な面持ちでバルトの頬に我慢汁塗れの巨根を押し付け、よく見ると恥垢塗れで生臭い亀頭を擦り付けながら根本を掴んで左右に振って竿で両頬を何度も優しく叩く。戸惑いながらも迫りくる圧倒的な雄欲の存在に慄き悦ぶバルトの無垢な表情に、普段の乱交や自慰では得られない強い愛欲が心身に刻み込まれるのを感じる。

「オレは、お前とやりたい。ケツマンを犯して、バルトの処女を奪ったヤツになりてえし、童貞を棄てさせたヤツになりてえ。……兎に角、お前が欲しくて堪らねえ……！」

そんなハロルドの本気の圧に、バルトの肉棒も正直に反応して瞬く間に勃起してしまふ。毛布を羽織るのを忘れて押し付けられたハロルドの肉棒の凄まじく雄々しい臭いに昏倒しそうになりながらも意識を保ち、言葉ではなく行動で答えを示す。

「はあっ、はあっ、はあっ………あっ、ああ………！んっ………！ふっ………。ジュルジュルジュルジュル……ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ………」

……初めて頬張った他人の勃起肉棒は、ゴム製のデイルドよりも硬く暖かった。より詳細に言えば、柔らかい肉膜に覆われた中に硬い一本の芯が通っているような不思議な感触で、流れ込む我慢汁の苦みが本物の雄の苦みと理解するだけで、バルト自身も我慢汁を漏らしながら肛門をヒクヒク疼かせてしまう。

表面に浮き出て脈打っている血管がハロルドの興奮具合を緻密に示していると思うと、よりハロルドの肉棒を欲したくなり自然と首を伸ばして根本まで呑み込んで顔を生い茂った陰毛の森に埋めてしまう。

「お、おいいきなり無理すんな。オレのぶつといチンポ一気に呑み込んだら窒息しちま……んっ！んああっ！？はっはっはっはっ………！こ、こんの優等生め………！ただ喉マッン鍛えてたんだよ………！」

童貞処女のバルトにとって、巨大サイズのデイルドを二本使って前後から凌辱レイプされる想像をしながらの喉膺自慰と肛門自慰は最大級に興奮する変態行為だった。そのまま肉棒を扱けば遥か遠くまで濃厚な精液が大量に吹き出て後始末に苦労したものだ。

だがその成果として、こうしてハロルドの巨根を難なく根本まで呑み込んで歓喜の呻きを上げつつ、喉の粘膜を器用に締め上げてハロルドの恍惚と巨根の暴走を励起させて受け容れることが出来た。

喉腔の処女を失ったバルトは、これまでの不安や恐怖を鬱憤と同時に晴らそうと一層激しく頭を前後に動かして舌と口腔、喉腔を使った巨根の搾精に夢中になる。ハロルドの徐々に熱く火照ってきた腰を掴んで鼻呼吸をしながら巨根をしゃぶり続け、時に涎塗れになったそれを吐き出しては恍惚とした視線で見上げながら顔面で受け止めて長く伸ばした舌で睾丸から裏筋、亀頭まで丁寧に舐め上げて初めての巨根に胸を躍らせる。

「ピチャピチャピチャ……ジュルジュルジュル……あっ、ああ……♡ハロルド……ハロルドの本物のチンポ、すごく……臭くて苦くて、美味しい……♡これが雄の味なんだな、そりや他の奴らも教官も夢中になる訳だ……」

「はぁ、はぁ、はぁ……！へ、へへっ……このムツツリスケベが、処女童貞だと思って油断してたら随分と独りで鍛えてたんじゃねえか。優等生は結局ソッチの予習も完璧ってか？……オレ、マジでお前に胸キュンしちゃいそうだぜ……♡」

「……！そ、そうか……♡だったら……ぶっかけてくれ、お前が言う優等生の仏頂面に。それから吞ませてくれ、お前が童貞処女だと思ってた奴のドスケベな喉マンの中に。経験豊富で雄狂いなハロルドの……遠くからでも臭ってきたメチャクチャ生臭い雄のフェロモンたっぷりな精液を……！」

「……顔面と喉マンだけでオレが満足すると思うなよ？ 覚悟できてんだろうな」

「こんな極限の寒い環境では人肌で温め合うのが最も効果的……。この前小説で読んだ。

……俺をメチャクチャに犯し尽くして体の中から燃え尽きて灰になるくらい熱く滾らせてくれ……。ハロルド……。！」

「言ったな……。バルト。こっちが言おうとセリフを横取りしやがって……。そこまで言うなら焚き火が嫉妬しちまうくらいに燃え上がろうじゃねえか……。俺とお前、唯一無二のバディとしてなあ……。！」

二人はハロルドのヌラヌラと照り輝く巨根越しに笑顔を向け合う。単なる快楽を貪るための雄交尾ではなく、バディとして、そしてそれ以上の関係に上り詰めるために命を燃え上がらせる軍人としての通過儀礼を行うために。

先に動いたのはハロルドだった。バルトの濡れた髪を掴んで一気に腰を押し付け、今度はハロルド自身のリードでバルトの喉腔を豪快に犯す。これまで何度も行ってきたイラマチオだが、デイルドだけで喉腔を慰めてきた童貞処女の舌捌きと吸い付きは無骨で乱暴な動きで正直上手くない。

しかし、普段は紳士的な優等生を演じていたバルトの必死な呻きと滑稽なタコ面に加え、蹲踞の姿勢で勃起した肉棒を至極続ける無様な痴態は想像以上の背徳感で、性欲に加えて思考と心をかき乱す愛欲が全身を沸騰させる。自然と髪を掴む指に手が入り、突上げる腰の動きは加速して巨根の抽挿で涎と喘ぎを大いに吐き出させる。

「ふーっ！ふーっ！ふーっ！おらっ、まだまだバキウム弱えぞバルト！オレの押す狂いなデカマラはこの程度のフェラと喉マンじゃ満足しねえぞ！」

「あっ、あふっ……わ、分かった……ゴブッ♡んっんっんっ……デュボツデュボツある……血の通った本物の勃起チンポ……！嗚呼、ハロルドのチンポ……こんなに、こんなに美味くて興奮するなんて……♡」

「そ、そんな事言うなよ。なんかこう……別の意味で恥ずかしーじゃねえか……」

「だ、だが本当に……本当にハロルドのチンポがエロくて……ああっ、鈴口はこんなにヒクヒク開閉するのか。脈動も強く裏筋も蠢いて……嗚呼！やはり本物のチンポで実際に犯るのは違う……！」

「はぁ……！はぁ……！はぁ……！ば、馬鹿野郎……んなに実況解説しながらチンポしゃぶんじゃねえよ。な、何か小っ恥ずかしくなってる……い、いつもよりエロく感じちまって……♡あっ、あうっ！？そんな舌の先っちょでチロチロ舐めんなぁ……♡や、ヤベ……オレとしたことが……も、もう……イク、イグッ……！」

バルトの常識外れなフェラチオに、ハロルドの爛れ切った心身も翻弄されて初心な反応を見せてしまう。本能の勢いだけ雄欲のとは違う、純粹な愛欲が絡んだ奉仕は見得を切って偉ぶってもまだまだ若輩者のハロルドに極上の快感を与える。じつくり迫り煽られる拷問のような快樂に抗える程鍛錬されてない軍学生は、年相応の可愛らしさで射精した。

ハロルドの鈴口から飛び出した大量の精液はそのままバルトの顔面にぶち撒けられ、驚き怯む精悍な顔に白濁の分厚い膜を張る。大口を開けられて舌を突き出されればその上に精液が溜まっては喉奥にドロドロと流れ落ちていき、生殖本能で濃度が高まった雄の苦みと臭みがバルトの上半身に充満していく。

「んぶっ!? おぼっ!? こ、こんな多いのか……!? も、勿体ない……んっ♡ゴキュゴキュゴキュ……んあっ♡ま、まだこんなに嘔き出て……俺の顔も胸もチンポも……本物の……ハロルドの精液でドロドロに汚されて……ジュルル……臭いし、苦い……! 嗚呼……エロい、凄くエロいぞ……ハロルド♡」

「はあっ! はあっ! はあっ! あぐううう……っ! い、一々ウルセエぞバルト! お、お前と犯るとスゲー気持ちいの……メチャクチャ調子狂っちゃまうわ!」

「わ、悪い。だが……その、想像以上に本物のフェラも気持ち良くて、精液も雄の味がして、チンポも生々しくて……。今の俺、凄く楽しくて……興奮してる……んっ! んああ……俺もイクう……♡」

一気に押し寄せるハロルドのリアルな汚濁に満ちた雄々しさに倒錯し、バルトは抜く隙も無かった勃起肉棒から勢いよく射精した。蹲踞姿勢のまま全身を痙攣させる射精はバルトの重心を崩し、精液塗れの肉体をそのまま後方に倒れて仰向けにさせてしまう。

その瞬間、極寒の洞穴内部で剥き出しの地面は凍えるほどに冷たいはずだが、それが心地良い冷たさに感じるほど全身から汗ばむ熱気を放っているのに気付いた。

こんな状況で無防備に晒されるバルトの処女肛門。喉嚨処女を奪われて本物の雄交尾に滾った雄欲で疼くそこがハロルドの前に露出されれば、次の展開は分かり切っていた。

「はぁ、はぁ、はぁ……バルト。上が終わったら……次は分かっているよなぁ……？」

「あつ、あつ、ああぁ……あん……っ♡あ、ああ……分かつてる……。そ、その……ディルドで日頃からちゃんと解してはいるが……優しく、いや激しく、犯してくれ……♡ハロルドのチンポ、俺の雄膣に……け、ケツマン、に……挿れて欲しい……根本まで全部挿れてもらって、本物の精液……下にも欲しいんだ……♡」

「……へっへっへ、言ったな？オレの本気で、今度こそその解説口調全部エッロイ喘ぎに変えてやらあ！精々気絶しない様に耐え切ってみろよ、バルト……♡」

一気に妖しい笑顔を浮かべて白い歯を見せると、ハロルドは自身の肉棒を掴んで上下に振り、尿道に残っていた精液をバルトの全身にぶち撒ける。そして、既に大きく開かれたバルトの太腿の間に膝をついて足首を掴んで一層両足を左右に開脚させる。

そこに見えるのは、微かに生える尻毛の中央でヒクヒク伸縮していた、処女にして十分に使い込まれた卑猥な変態の肛門だった。バルト自らも尻の肉を掴んで左右に引っ張り存在を誇示させ、弛緩した肛門と溢れる雄蜜でハロルドの巨根に臨戦態勢を取らせる。

そして、真剣な表情で乱れた髪から融けた雪か汗か額に雫を滴らせながら、ハロルドが四つん這いになって覆い被さってくると同時に硬く起立した肉棒をバルトの雄膣にゆっくりと堪能するように挿入して、処女を奪っていった。

いや、バルトが処女を捧げたと言ったほうが正しいかもしれない。目の前にいる同級生は今やバルトの心身の全てが虜にされた愛おしきバディであり、それが例え吊り橋効果による一時的な感情であっても後悔はなかった。

これまで軍学校に入学してからは自身の全てをアズアテラ群に捧げる覚悟で日々優秀な成績を収め続けたバルトにとって、生まれて初めて燃え上がった恋愛感情はあまりにも過激すぎて、軍学生としての自身を忘れてしまうほどまでの強い感情の虜にされる。

これまでは半信半疑だったハニートラップの効果がこれほどまでに絶大だと体験できたのは、良くも悪くも大きな実りとなった。

「あつ、あつあつあつあつああああ……熱い……っ！本物のチンポ熱いつ♡は、ハロルドっ、ハロルドっ、ハロルドのチンポ太い……！大きい……！長……あああああっ♡」
「くっ、ぐおおおおお……♡こ、このトロトロガバマンが処女ってマジかよ……んぐっ！？い、いきなり締め付けん……ああっ！こっから本番だつてのによお……♡」

尤も、ハロルドも全く同じ気持ちでバルトに惚れてしまっているのだが。

単なるセフレとも違う独特なバルトの生真面目さと初心さに心が揺さぶられ、生娘のような喘ぎぶりとは裏腹の伸縮性の強い雄膺による搾精はあまりにも心地よい。

未だ逃げ切れていない死と隣り合わせの中の雄交尾という背德的シチュエーションも相まって、己の全てをバルトの肉体に捧げようと歯を食いしばってバルトの奥底で待ち焦がれているであろう性感帯を探り掘る。

「あっ♡あっ♡あっ……あぐっ!? ああああ♡は、ハロルドお♡そ、そこ……そこが俺……す、凄く……前立腺、で……俺、おれえ……」

「んおっ!?! い、一気に吸い込んでくんじゃねえか……この欲しがりケツマンめ。わあつてるよ、そこがお前のGスポットってことね。……お前のせいでギンギンに勃ちまったオレのチンポの先っちょの硬さとテクニク、処女ケツマンでしっかりと覚えるよ。バルト、もうお前は二度とオレのチンポの形を忘れられなくなっちゃったんだからなあ♡精々オレをもっと悦ばせろよ……んで、さ……ほ、惚れさせろよ……」

最後の一言はハロルドには珍しく囁くような小声になり、それを合図にハロルドの腰がバルトの尻と乾いた音とともに衝突して一気に根本まで突き刺された。血の通っていないゴムの作り物ではない、筋骨隆々で淫乱で愛おしく想う雄の肉体と繋がっている本物の肉棒が、バルトが予想できない動きで攻め立てる。

「あつ、ハロルド……んっ!? あああっ!? ま、待ってくれ体が追いつけな……」

「うるせえ。オレは待てねえんだよ……! こんの天然タラシめ……♡」

「あんっ、あんっ、やああんっ♡そ、そんな……こんな気持ち良いなんて知らないっ♡自分でアナニーするのと全く違うっ♡あつあつあつあつ……♡」

自身でデイルドを動かし自身のGスポットを当然のように弄るのと異なり、自らの意思とは全く連携しない動きで性感帯を舐られる感覚は想像以上に意表を突かれる衝撃で、バルトは快樂の喘ぎを堪えることができない。

そのまま雄盛りで濃厚な精液を結腸の奥にまで流し込んで処女の腹部を満たしていく。子種が孕んでいく度に腹筋は盛り上がりバルトの童貞肉棒をより強く二人の間で圧迫されていくのを察すると、腰を固定したまま体を激しく揺さぶって精液塗れのヌルヌル腹筋で強く扱き上げてトコロテン射精を後押しする。

手首を掴む手にも骨を折りそうなほどの力が入り、せがまれたディープキスにも反射的に応えて唾液を掻き混ぜ合って貪欲な舌を舐め合う。同級生、先輩、教官……これまでのどんな雄狂いよりも初心で純朴だった筈なのに、その誰よりも心惹かれ雄欲の熱情が溢れ出るバディに心身の全てを虜にされる。

バルトは勿論、ハロルドも雄々しさに惹かれる雄狂いの本能的に察していた。目の前で淫らな表情を浮かべてディープキスを繰り返す痴漢に、自身が恋してしまったことを。

そして、この豪雪の寒さを忘れるほど昂り焚き火以上に燃え上がる体温が一晩中萎え冷える事は一瞬も無いであろうことを。

「はっ！はっ！はっ！おいつバルトお！まだまだ……まだまだ続けんぞ！今度は……お前の童貞を奪ってやらア！オナニーで鍛えた黒光りチンポで、オレのケツマン満足させてみみやがれ……♡」

「あぐづあぐづあぐづグググ♡ハロルドっ、ハロルド犯すっ♡俺もハロルド犯して……ザーメン沢山孕ませてえ……！でも、でもまだ俺を虐めて……もっと俺の奥にチンポハメてザーメン注いでえ……♡」

「へ、へへへっ……ハハはハッ！こんの絶倫童貞ちゃんめ♡あわったよ！お前が望むだけオレの子種孕ませて射精させてやらあ！後悔して子種の代わりに小便漏らて泣くんじゃねえぞバルトお！！！」

……絡み合う二人の肉体から溢れ出す雄汁が焚き火へと流れていき、轟々と燃え盛る薪の中へと流れ込んでいく。二人の愛欲に併せて燃え盛る焚き火に燃やされて蒸発した雄汁が発するのは高濃度の雄臭く熱せられた蒸気。

最早バルトとハロルドの二人だけが存在する狭く臭く汚い世界は、一層雄の熱気で満たされて洞穴の土壁に浸透していき、より強固な城砦となって猛吹雪で積もった雪よりも深い愛欲を育ませるのであった。

「……んで、丸一日盛り合って互いに全身汗やらザーメンやら潮やら小便やらで汚いまま過ごしたんだよなー、スッゲー懐かしいぜ」

「はぁ、はぁ、はぁ……そうだな。しかも体中に痣や爪痕、噛み跡まで残って暫くは入浴時間の時は絆創膏や包帯で隠してたんだったな……んっ♡ああ……あれからずっとお前と一緒にだったな、ハロルド。お前に誘われて乱交にも混ざって、野外プレイやSM……拷問プレイにも目覚めて……んあっ♡ハニートラップ『実習』でも大いに役立ったな……んおっ♡や、やはりお前は俺を犯すのが上手いな……またイクぞ……んづ、んお……！」

二人の出会いについて思い出話に花を咲かせながら、ハロルドの股間に跨っていたバルトは背筋を震わせて勢いよく射精した。一度シャワーと浴槽で全身を綺麗に洗い流したのにも拘らず、既に汗塗れ雄汁塗れに汚れたハロルドのニヤケ面から分厚い胸板までに白濁の太い軌跡を残した。

パイス・ブランの深夜の大浴場は未だ大繁盛で、二人の語らいが掻き消されそうなほどの野太い咆哮や淫らな雄交尾音が反響し続けている。二階にある高い塀と屋根で目隠しされたバルコニーでも生温い初夏の夜風の中で半野外露出交尾に夢中になる雄盛りの野郎が多い。

バルトとハロルドも大浴場での他の客との激しい大乱交で火照った体を休めるため、そして二人だけで静かな癒やしを与え合うセックスを行うために、撥水クッション付きのベッドチェア上でゆっくりと腰を動かしながら互いの愛おしい肉体を堪能している。

完全に一体化したように拍動を同調させるバルトの膣壁とハロルドの巨根は互いの体温堪能しながら未だ猛り続けているが、最早その状態が自然だと言わんばかりに隙間無く吸い付き合って愛おしげに愛撫を継続する。

顔面に浴びせられたバルトの精液を満足気に舐め取りながら、ハロルドも意気揚々と射精して当然のように自身の脳天を超える飛距離を見せる。そして、互いの精液が混ざりあった口腔に涎を滲ませてバルトの頭を優しく引き寄せ、余裕たっぷりな動作でディープキスをしつつ年季の入った濃厚な雄汁を味わい香り合う。

年々濃度を増していく嗅ぎ慣れた互いの青臭い精液の臭いに悦び寛いでは、久々に与えられた安息の月夜に沈む。

「んっ……ふぁ……♡結局、あの雪中行軍に参加した生徒の大半が遭難して死傷者多数の大惨事。退学者も続出で軍学校は生徒遺族に多額の賠償金を払う羽目になり、強行した教官は責任を問われて軍法会議に掛けられて降格からの左遷でそのまま『行方不明』……嫌な事件だったな」

「あんっ、あっ、あっ……ま、全くだ。その最中、俺たちは洞穴の中で吹雪が収まるまで延々と生雄交尾に夢中になってたなんて口が避けても言えないから……」

「んお……！　そう言う割にはケツマン搾って興奮しやがって……」

「俺にとって……アレは本当に初めての雄交尾だったからな。未だにアレを上回る興奮を覚えた背徳で淫靡な体験は存在しない……んっ♡はぁ、はぁ、はぁ……そ、それにあの大惨事から無事自力で生還した成果が評価されてお前諸共教官たちから一位置かれる存在になったんだ。……犠牲は大きかったが、俺たちにとっては間違はなく今の地位に収まるに必要な出来事だったんだ……あんっ♡いきなり突くな……意地の悪い奴め……」

「ふーう……、そりゃお互いだろ。学生だろうが、軍での出世争いは弱肉強食。成績、生活態度、知識、体力、時の運、そして……『日頃のコネ』。全てを発揮しなけりゃ殉職か退軍、良くて下っ端で軍人生活を終わることになるんだ。他の奴らはそーゆーのに恵まれて無かったんだよ、今更悔やんでも馬鹿馬鹿しい。お前が毎晩毎晩部下を侍らせて絆を強める儀式も行えなかったってこったよ。……オラオラ、久々のバリネコはどうだ？　オレ的には最高にエロくて最高だったぜ」

「はぁ、はぁ、はぁ……お前にそう言われるなら嬉しい。いつまでも情感として部下をリードするのも疲れるからな。……男というものはどんなに心身が鍛錬されても偶には誰かに甘えたがる弱い生き物だ、お前が居てくれて良かった、ハロルド」

何の忖度もない実直な愛の告白に、ハロルドは小っ恥ずかしそうに頬を染めつつ薄っすら笑って軽く受け流そうとするが、バルトの中で怒張する肉棒は素直に反応して礼代わりの前立腺突撃をキメる。

「んあっ!？あぁ……♡本当、お前は昔から素直じゃないな」

「う、うるせー。お前が上っ面装うの上手くなったただけだろう……がっ!」

「んふっ!？ほ、本音を顔に出さないのも任務だからな。……んっ♡あっ……♡お、お前だって飄々と万事を受け流しながら真実にスリと入り込む。立場と役割が違うだけで俺たちの本質は同じだ」

「あー……そんなつもりはねえんだが……ま、愛しのバディからのお褒めの言葉として受け取ってやる……ぜっ!そろそろ……月を見ながら次のガチセックス始めっか?」

「……そうだな、そろそろ俺も……お前が欲しくなってきたところだ。激しいのを頼むぞ、ハロルド」

「……お前も慣れた風に誘うねえ、軍学校ん時とは偉い違いだ……なっ!」

バルトの肩越しに見える美しい夜空と満月を見ながら、ハロルドはバルトの腰を掴んで両足をベッドチェアーから左右に垂らしてタイル地の床を踏ん張り腰の動きを加速させる。学生時代とは桁違いに傷だらけになった肉体に力を込めて筋肉を隆起させ、下半身の力だけでバルトの体を何度も弾ませて深々と巨根を前立腺に食い込ませ、そのまま肉弁をこじ開けて結腸を雁首で何度も舐る。

バルトも雄膣の奥から腹筋の裏側まで貫いて抽挿される巨根の感触に天を仰いで感嘆し、自分の乳首と肉棒を弄り慰めながら好き放題に騎乗位で犯される。敢えて声を大きくして周囲の注目を集め、血走った淫蕩な視線に視姦されるよう努める。

軍学校で上級生になってから生やし始めた雄々しく紳士的な髭。そんな髭面で壮年の雄が艶めかしい嬌声を上げながら、騎乗位で雄膺を犯されながら乳首と肉棒で自慰をして悦びの射精と惜しげもなく見せつける……。

学生時代に憧れた容姿の男そのままの姿に年齢を重ね、学生時代に穴が空くほど読みふけた艶本と同じようなシチュエーションで犯される自分自身を、学生時代の自身が見たらどう思うのだろうか。

ふと、乳首を弄る手を自身の顎に移動させて自慢の顎髭に触る。毎日欠かさず整えている趣味にして自慢の髭はバルトにとって雄々しさの象徴であり、数少ないアイデンティティでもある。無意識の内に髭を触っては自身の心の安寧を保ち、冷静さを取り戻すのがクセになってしまっている。

例えどんなに涎で汚れようと、フェラチオやイラマチオで呑み込んだ精液でドロドロになっても、その存在はバルトの心を男として軍人として強く保ってくれる。

「あっ♡あっ♡あああああ♡深いっ、ふかいトコまで届くお前のチンポ最高お！もっと犯してっ、もっと俺をつ、俺だけを見てくれハロルドお……！ま、周りの皆ももっと見てくれ……俺が犯されてアへってるエロ姿……もっと見てくれえ……♡」

（嗚呼、髭を生やし始めたのは何時だっただろうか……？そうだ、上級生になってから生やし始めて髭で雄々しくなった自分に酔いしれてから、あの『模擬任務』を受けた時にはもっと立派な髭に憧れてて、ハロルドとも一緒に……）

ハロルドに犯されて甲高い喘ぎを上げて周囲の雄狂い共を呼び寄せ、次々と勃起した肉棒を突き付けられて、両手でそれらを握って必死に扱きながらフェラチオに励んで刺激に飢えた喉嚨に雄肉の摩擦と精液の苦みを与える。

そんな極限状態でも、バルトは再び未熟だったあの頃の記憶を思い出してしまう。まだまだハニートラップにも不慣れで、雄交尾をするにも気恥ずかしさが勝ってしまう、雄々しい大人の髭に憧れていた純朴な青年だった頃の自分自身を。

「重要密書の保守……ですか」

あの大規模遭難から数年。上級生となって希望通りに士官コースのクラスで日々講義を受けていた若きバルトは、講義室で教官から告げられた新たな『模擬任務』を思わず反芻した。

恋人同士として周囲に隠れて密かに付き合っているハロルドは諜報員コースにスカウトされてクラスが分かれてしまったが、講義が終われば個室になった互いの部屋を行き来して日々充実した逢引と性生活に勤しんでいた。

そんな中で教官から出された『模擬任務』の内容に、思わずバルトだけでなく教室中が驚きと戸惑いで少なからず騒がしくなる。

「全員静かに。今からこの教室にいる生徒全員に封筒を一通ずつ配布する」

教官が掲げたのは、軍学校の購買でも売っている一見何の変哲もない白い横長の封筒であつた。唯一違ふ点と言えば、アズアテラの紋章を象つた赤い封蝋で嚴重に中身が守られている箇所だろうか。

「蝋でしっかりと封をされた封筒の中には各人別々の記号が記されたカードが入っている。君たちにはその記号を他者に知られないように一週間守り切って再提出してもらう」

「……だったら誰にも喋らず部屋に隠しときゃいいじゃん。楽勝だな」

「いや、『模擬任務』という以上はどうせ何かしら邪魔が入るんだろう」

「そこ！今から詳細を説明するから私語は慎め！」

教官に指を刺されての怒号に驚き肩を竦めた生徒二人を尻目に、バルトは顎に生やし始めた髭を弄りながら思考を巡らす。

「さて、ヤツが言った通りこの模擬任務には邪魔者……要するに君たちの持つ重要密書を奪おうとする相手が存在する。正に今、同じ時間に講義を受けている諜報員コースの生徒たちが君たちの密書を奪うように指示されている頃だろう」

教官の言葉に教室が再び騒がしくなる。諜報員コースと言えば他のコースから適性を見出されて直接スカウトされた者たちで集められた、ある意味実力主義のエリート集団である。その講義や実技の内容は他コースの生徒たちには徹底的に伏せられ、非常に厳しい講義や実技を行っていると言われている謎多き存在とも言われる。

故に他のコースの学生からは若干避けられる傾向があるが、ハロルドのようにバルト含めて妙に社交的な生徒も多い。それはそれで教官からの指示で学生間での不穏な情報を収集していると噂されてしまっているのだが。

「諜報員コースの生徒はランダムで士官コースの誰を標的にするか決められ、一週間の期限内の中でこの記号カード入りの封筒を奪おうとあらゆる手段を講じてくる。将来軍に士官し上層部を目指す君たちはそれに対し全力で立ち向かって欲しい！」

そこまで模擬任務の内容を聞くと、徐ろにバルトは挙手をして発言の許可を求める。

「教官、模擬任務に対して何点か質問をしても宜しいでしょうか」

「うむ、質問の時間は後で各自に与える。しかし公平を期すために別室で一人ずつ質問に答えよう。その前に諜報員コースとの共通のルールについて説明しよう」

教官は黒板にチョークで手早く複数の項目について簡潔に板書していき、全て書き終わると再び生徒たちに向き直って説明を開始する。

「その一、蜜書を守る、及び奪うためにはどのような手段を講じても良い。何かしらの道具を準備しても良いし、他の者と協力しても良い。諜報員コースの生徒との一時共闘もありだ。流石に相手への拷問や殺傷等の命に関わる手段は問答無用で失敗扱いだ。本番ではそう言ってもいられないが飽くまで模擬任務、合理的かつ平和的に挑むように」

『拷問』『殺傷』『本番』等という物騒な単語が教官の口から当然のように告げられると、一部の学生は恐怖で表情を引き攣らせる。

バルトは無表情のままだが、寧ろ別の心配を内心抱えていた。

「その二、この模擬任務に関しての情報は士官コースと諜報員コース以外の者以外への漏洩を禁止する。飽くまで士官コースと諜報員コースの間での模擬試験だ、それ以外のコースの生徒や教官、若しくは身内含めた一般人への協力や助言依頼は不可だ。言葉、読唇術、筆談、手紙、手話、モールス信号、暗号、ボディランゲージ、レリック通信他諸々。判明次第任務失敗として扱う。勿論模擬任務に関する全ての単位は没収だ」

ここまで来ると、教室内は緊迫した空気に支配されて、バルト含めた生徒たちは真剣な表情で教官の話に耳を傾ける。

「その三、蜜書の提出はあくまで一週間後の講義の時だ。一度奪われても一週間後の講義までに奪い返して守り抜けば合格とする。無論、その間の講義や実習には決して休まないように。実家への帰省も禁止だ。病気や怪我などの止むに止めない理由で欠席する場合は欠席した分だけ密書を守る日数が伸びる、仮病で私室に引きこもって籠城では実践的な講義とは言えないからな。それに、その分だけ諜報員コースの奴らに狙われる日数が増えることでもある。正々堂々、アズアテラ軍人としての自負を持って任務を全うするようにしろ。……共通ルールに関しては以上だ、これより各自の質問に移るので私は隣の個室に移動して一人ひとりから質問に答えよう。質問に関しての内容と返答は他の者と共有するのは自由だが……自分の考えた策を他人に先に使われて出し抜かれないように注意はするのだな。」

教官の一言で、教室の空気が一気に緊迫するのが分かる。それまで仲良く雑談していた者同士も急によそよそしくなり、分かりやすく距離を置き始める。

「最初は……一番最初に質問をしたいと名乗り出たバルトからにするか。バルト、個室に來い。最初に挙手したのなら質問する内容は既に決まっているのだろう？」

「はい、ある程度は定まっています。共通ルールを聞いてから数点増えましたが問題ありません。今向かいますのでお待ち下さい」

バルトは逡巡するような素振りを見せずに素早く席から立ち上がり、颯爽と教官の後を追って個室へと入って扉を閉めた。

倉庫として使われた雑然とした薄暗い部屋の中、ボロい木製の椅子に座って教官と向かい合って座ると、先に教官が話し出す。

「さて、お前の質問を聞かせてみる、バルト」

「分かりました。まず一つ目の質問ですが……」

「士官コースの奴から密書を盗むねえ、まあこれまでの実習と比べれば楽っちゃ楽だけど……嫌な予感が当たっちゃったなあ」

講義終了の合図であるベルが鳴らされると、ハロルドは諜報員コースの講義が行われていた教室から憂鬱な表情で出てきた。他の生徒も一様に重苦しい雰囲気醸し出しながら色々思案しているのが丸分かった。

士官コースとは逆に密書強奪の模擬任務の説明をされて驚き戸惑うのも束の間、クジ引きで標的となる士官コースの学生を決める必要があった。ハロルドは「まさかな」と思いつつクジの入った布袋に腕を突っ込み、意を決して取り出して書かれている名前を目視して眉間に皺を寄せて自身の運の悪さを呪った。

他の生徒に標的がバレないように沈黙したままクジを返し、誰が標的になったのかと一部の物好きな同級生に訊かれても適当にはぐらかした。

（ああ、最悪ー、まさかバルトが標的になっちまうなんてよお。アイツの部屋には入り浸って構造は把握してっけどよ……どうすつか、これ）

自身が密書を盗めばバルトが単位を落とし、バルトに気を使えば自身の単位が落ちる。他の同級生がバルトの密書を盗むことになったら全力で邪魔をする予定だったが、アズアテラ軍の鋼の如き冷酷さはそんな甘い恋心を許してくれないらしい。

そうなれば、恋人だろうと容赦はしない。こちらと諜報員コースで上位の成績を収めて将来優秀と期待されるまで株を上げた身分だ、こんな所で入隊の夢を諦めるわけにはいかない。

（……悪く思うなよバルト、オレも本気で行かせてもらうぜ）

バルトの頭脳戦の強さは誰よりも知っているつもりだ。ボードゲームでも、カードゲームでも、共同演習でも、何よりベッドの上でもこちらの先を読んで尽く裏をかいて翻弄してくる。本気で挑まなければあっさり返り討ちに合うだろう。

一人の軍学生として恋人を捨てる覚悟を決めると、ハロルドは取り敢えず一人で作戦を練ろうと私室へ戻ろうとする。他の同級生は集団で誰かの私室に戻って協力体制を築く様子だが、ハロルドにはそんな思考は最初から存在していなかった。少なくとも、標的が最愛の雄であるバルトだと決まっただけからは。

だが、そんな時に限ってアズアテラの冷徹さはお茶目な意地悪を仕掛けてくる。

「あ、ハロルド！……講義お疲れ様。この後昼休にだから一緒に食堂行かないか？」

丁度校舎の購買部や食堂、宅配所が集結している比較的明るい雰囲気の中でバルトと出会うとは思っていなかった。思慮深いバルトのことだから自身と同様にさっさと私室に戻って作戦を練っていると思っていたからだ。

「お、おうバルト！そっちもお疲れさん。丁度オレも飯食おうと思ってたから一緒に行こうぜ。今日の講義は久々頭使って腹ペコペコだからなー」

「……そうだったのか。俺も色々考え過ぎてカロリーが欲しかったところだから、久々に重い定食でも頼もうかな。……あ、はいそれです。ありがとうございました！」

会話の途中、バルトが礼を言って宅配所のカウンターから小包を受け取っていた。防水紙で梱包された上にビニールを被せられたやや大きめの物体で、包装には『検閲済』と赤いインクでスタンプが押されていた。

「あん？お前また何か本買ったのか。図書館行けば本なんざ沢山読み放題なのに、相変わらず好きだねーお前は」

「そりやそうだけど、図書館だけじゃジャンルに偏りがあって幅広い知識を得るにはやっぱり自分で選んで買った方が確実さ。それに今回の本は勉強用じゃなくて趣味用の本だから、久々に楽しく読めそうなんだ。あ、すいません。それとこの本の配送お願いします。」

宛先はパイス・ブランの古書店で、店名と住所は……」

こうして本を取り寄せたり読み終えた本を古書店へ売りに出すのは、最早バルトの習慣となっていた。バルト個人としては読み終えても自身で購入した本は手元に残しておきたいが、私室の広さが限られる以上泣く泣く手放す羽目になってしまう。

「趣味の本……なるほどホモエロ本か。見終わったら後で貸してくれよ？」

「悪いが今回は違う。それにエロ本だったら検閲係が盗み読みしながら自慰した時の臭いが染み付いてる。今回は綺麗爽やかな冷氣しか感じないだろ？」

「うげー……。ちゃんと仕事しろよ検閲のおっさん共よお……」

そんな談笑をしながら、ハロルドは筆記用具をズボンのポケットに無理矢理ねじ込み、バルトは筆記用具と受け取った本を袈裟懸けした鞆に容れたまま食堂へと向かった。狙いの高カロリー定食の列に並び、いつもの二人用のテーブルに腰を下ろして向かい合って食事の挨拶をしてからランチタイムを始める。

他の学生たちも次々と席に座って食事を始める中、バルトとハロルドは煮込みハンバーグとブレッド、オニオンスープの食べ応え抜群の定食に手を付ける。普段ならば互いの講義や実習の愚痴や学生の間の噂話、外出日の予定について計画したりと年相応の他愛もない会話をするが、今日は講義の内容が内容だった故にどちらも黙々と食べ続ける。

「……士官コースと諜報員コースの奴らは皆無口だな。俺もそうだが緊張してるんだろ？な、それまで仲間だった同級生が急にライバルになったんだからな」

先に口を開いたのはバルトだった。

お気に入りのお髭を汚さないようにゆっくりと食べながらも、周囲の様子の変化を即座に察知している。

事実、昨日までの和気藹々とした空気がどこかピリピリした空気が漂っており、他のコースの学生たちとは明らかに異なる緊張感を醸し出している。それまで仲良くしていた士官コースと諜報員コースの学生グループも自然とコース別に分かれて席に座っており、異なるコースで今まで通りに食事をしているのはバルトとハロルド位であった。

「……だな。ま、互いの事情が事情だし警戒心バリバリマックスなんだろう。軍学校なんだから、今までの仲良しこよしの甘ったれた関係よりはマシなんじゃねえか？」

「相変わらず手厳しいなハロルドは。お前だって多少は緊張してるんじゃないのか？俺に情報を抜かれやしないかヒヤヒヤしてるのか、それとも何か情報を入手しようと探りを入れようとしているのか……。どの道、俺もお前もこれまで叩き込まれた知識や経験を総動員していかないとな」

「……そうかもなー。お互い頑張らねえと卒業なんて夢のまた夢だ、本気出していかねえとなあ……ふー」

標的であるバルトに当たり前なことを言われて、ハロルドは思わず溜め息を漏らしてしまう。身近な相手だからこそ懐に入り込むのは簡単だが、相手はこちらの思考や行動を一番熟知してると思われる上に士官コースのトップ成績と噂される恋人、バルトである。そう簡単には蜜書を奪い取ることはできないだろう。

思わず自分の運の悪さへの嘆きと現実逃避を兼ねて、腕を伸ばしてバルトの顎髭に絡んだデミグラスソースを指で掬ってペロリと舐め取ってしまう。やはりというか自分と同じ煮込みハンバーグを食べているだけあって肉汁の混ざった同じ濃厚な味がするが、愛情の分だけ少しだけ美味く感じられる。

上級生となって顎髭を生やすのが許可されるや否やすぐに生やし始めたバルトの髭は、学生とは思えないほど立派に映え揃っており日頃の手入れも欠かさないもので、そこらの教官よりも雄々しく凛々しい表情に見えてしまう。やはり髭は雄をより一層雄として魅力的にしてくれる……のかもしれない。

しかし、そんなハロルドの悩みを知ってか知らずか、バルトは突然のハロルドからの積極的なスキンシップに目を見開いて驚く。

「……お前にしては随分と積極的だな」

「あん？いつもオレは積極的だぞ、なんなら夜に部屋で一発決めるか？」

「いやそういう下世話な積極性ではなくてな……。ああ、でも……」

ハロルドが撫でてくれた顎髭を嬉しそうに撫でながら、バルトは先ほど宅配所で受け取った荷物を横目で見る。

「飯食い終わってもまだ午後の講義まで時間あるんだろ？だったらオレの部屋に来ないか？どこもかしこもピリピリして居心地が悪いし、久々にお前とセックス無しで食後のコーヒーで喋らないか？届いた本も一緒に読んで欲しいしな」

ハロルドにとっては絶好の機会である。なにせ密書の標的が自ら自身の私室に招いてくれるのだ。普段からよく遊びに行っている場所とは言え、模擬任務遂行には必須の行動でもあるのでそれが初日で行えるのは運が良い。

……もしかしたら、逆にハロルドの動向を探ろうとしているのかもしれないが、『虎穴に入らずんば虎子を得ず』である。

「……………。いいぜ、どうせオレもヒマだからな。お前がどんなニツチなエロ本買ってきたかも気になるしな♡」

「だからそういう本ではないと言ってるだろ……。ま、そうと決まればさっさと食器片付けるか、午後の講義まで時間があるとは言え無為に時間を過ごす訳にはいかない」

「了解、さっさと片付けて部屋でコーヒープレイクだ」

足早に食器を片付けて講義を行う校舎から渡り廊下を歩いて学生寮に戻ると、そのまま二人してバルトの私室に戻ってきた。

学生寮の私室はどの部屋も基本は同じ構造をしており、窓際にはデスクと椅子が、扉近くの壁際には本棚とクローゼット、反対側の壁際には木製のベッドが設置されており、そこから学生それぞれの趣味で家具や小物を置いて心身が落ち着ける環境を作っている。

「それじゃあ適当に座って待ってくれ、今コーヒーを沸かすから」

「了解」。にしても相変わらず本ばっかだな。本棚入り切らなくて暖炉の上に積み重なってんじゃねえか、下手したら燃えちまうぞ」

「う……。し、湿気でカビるよりはマシだからな。それにお前の部屋よりはキレイにしてるつもりだぞ。デスクの上は教科書や課題でメチャクチャだし飲んだカップはそのままでし本棚にはエロ本や教科書がメチャクチャで床には脱ぎっぱなしの下着や肌着が大量に。せめてゴミ箱はザーメンティッシュで溢れる前に捨ててこい」

「うっせーな、お前が几帳面すぎるだけでフツの男は汚部屋が普通なんだよ」

「全く、そっちこそ湿気でカビちまうぞ。……ほら、俺の淹れたコーヒーどうぞ。セパイアから輸入したレリック使用の高級品だ、すぐに湯が沸いて便利だぞ」

「サンキュー。セパイアからの輸入とかどんだけ高級品だよ。オレに隠れて体売ってんじやねえのか？」

「失敬な、公認の学生バイトでコツコツ稼いで買ってるんだよ」

デスクの上に置かれたコーヒーサイフォンから抽出されたブラックコーヒーを、バルトはベッドの上に座り込んだハロルドに手渡す。コーヒー汚れがこびり付いた使い込まれたカップから立ち昇るカフェインの香りは食後のまどろみを霧散させてくれ、一口飲めばかすかな甘味を覚える苦みが脂ぎった口腔をさっぱり洗い流してくれる。

「今日は砂糖かミルク要るか？」

「んー、今日はブラックのまま飲みたい気分だから遠慮しとくわ」

「ほう、ハロルドにしては珍しい。普段は甘いコーヒーをガブガブ飲みまくってるのに」

「お前が買った珠玉のエロ本の内容が気になるからな、シャッキリしとかねーと」

「まだ言うか。……まったく、エロ本じゃなくてちゃんとした本だよ。ほら、この布張りの表紙がエロ本に見えるか？」

呆れた様子でバルトがコーヒーを啜りながら、荷物の包装を解いて中身をハロルドの目の前に差し出す。それは濃い緑色をした布張りの表紙で製本された堅苦しい雰囲気漂う書物で、銀の刺繍で描かれた表紙はまるで重苦しい内容の歴史書のように見える。

「何だこりゃ。タイトルはえーつと……『髭の美学』。やっぱエロ本じゃねえか」

「髭イコールエロに繋げるのは止めろ！ どんだけ雄交尾脳なんだよ」

呆れ半分怒り半分の大声を出しながら、本を手にとって代わりに自分の腰を落とす。再びコーヒーを啜ってからデスクに置いて、両手で『髭の美学』を開いて読み始める。

「……俺、軍学校卒業して正規の軍人になれたらもっと立派な髭生やそうと思ってな。どんな髭が良いかなと思って参考にしたかったんだよ。やっぱり髭の生えた男って威厳があって男らしくて格好良くて……その、え、エロいと……思ってたさ」

「………やっぱエロ本じゃん」

「お、俺の中でだけだから！ 本自体は健全だから！」

ハロルドは早々のカップの中を空にすると、ページを捲っているバルトの横から本の中身を覗き込む。そこには正面と横から見た髭を生やした男の挿絵と共に髭の名称や起源だけでなく、その髭がメジャーになるまでの歴史、その髭を生やした歴史上の人物の名前、その髭を生やして手入れするための方法などが事細かに記述されていた。

視線をバルトの横顔に戻すと、その表情は常時真剣に見えるが時折穏やかに笑っては自分の顎髭を触り、自分がこの髭を生やしたらどんな雰囲気になるのか想像しているのが手に取るように分かる。

……実際問題、バルトが本に熱中している現状、密書の隠し場所を搜索するには最適な時間なのだが、それよりもハロルドは気になることができてしまいそれどころではない。

「……なあバルト」

「何だ？ コーヒーのお代わりなら勝手に注いで良いぞ」

「お前、やっぱり髭を生やした男の方が好きなのか？」

「えっ。そ、そりゃあ……どちらかと言えば……。で、でも別に絶対条件って訳でもないし、俺自身が髭を生やすのが好きなだけでそれを相手に求めるのは……」

「じゃ、じゃあよ。オレが髭生やしたら……今よりもっと好きになったりするんのか？」

「えっ？ あっ……！ べ、別にそういうつもりで言った訳じゃ……。い、今のままでもハロルドのことは好きだし別に髭を生やさなくても……」

「……じゃあ、オレも髭生やそうかなー。なあバルト、お前は顎髭だけオレにはどんな髭が似合うと思う？」

砕けた口調とは裏腹に真剣な表情で詰め寄ってくるハロルドに、思わずバルトは狼狽して顔を紅潮させてしまう。このままベッドに押し倒されそうな雰囲気だが、バルトは一度咳き込んで上半身を押し返す。

「……ゴホンッ！お、お前が髭を生やしても良いんじゃない？この本を読んでどんな髭がお前に似合うか二人で一緒に探そうか。……きつと、いや絶対にカッコイイと思うぞ。課報員なら気取った髭よりもちよつと無骨な髭の方が似合いそうだ」

「マジで？へへっ、じゃあどんな髭があるのか一緒に見てみようぜ。ほら、オレにも見せてくれよー♡」

バルトに抱きつくようにハロルドが肩に顎を載せて本を背後から覗き込む。本を持っている手に自身の手を重ねてページを捲り、次々と出てくる様々な髭を生やした雄たちの挿絵やレリックで撮影した写真を見る。

……そして、並行してバルトの体に触れながら制服の下に密書らしき不自然な感触がなか確認する。ページを捲りつつも上腕と胴体、果ては股間で感触を確かめるように自然と、だが強引に背後から抱き締めるような姿勢になる。色々な意味で抱き慣れたバルトの肉体だが、制服越しには密書らしき紙の感触は見つからない。

（一応、上半身には異常なし。となると、隠し持っているとしたらズボンの裏か靴下の中、靴底の間、若しくは……）

「な、なあこの髭なんかどうだハロルド。面長なお前にぴったりだと思ふんだが……」

普通の雄同士なら単なる悪ふざけに見えるかもしれないが、恋人同士の二人にとっては無意識の内に邪な欲望が体温とともに昂ってしまう。仕掛けられたバルトは勿論、仕掛けた側のハロルドでさえも。

「!？あ、ああ悪い。どれどれ……なんだ、単なるチョビ髭じゃねーか。もっとこう、オレの雄のダンディーさを醸し出せるような……」

「チョビ髭じゃなくて『スコッチ』という名前だ。お前みたいな人たらしでひょうきんな性格の奴にはぴったりだと思うぞ。手入れもそれほど大変じゃないし、無精のお前でも毎日整えられるだろう」

「うーん、そうかねえー。だったらバルトは最終的にどんな髭になりてーんだ？」

「そうだな、俺は……こんな髭になりたいな」

バルトはページを捲っていき様々な髭面の男の顔を流し見していると、とあるページでめくる指が止まる。

「……あくまで願望だが、こんな髭が良いな。見るからに雄々しい紳士……って感じで憧れちゃうな」

「マジか。思ったより随分とゴツイ髭狙ってんだな。メチャクチャ手入れ大変そうだな、でも温かそうではあるな。寒い時にはもしやもしや触らせてくれよ？」

「えー、どうしようかな……髭が乱れるのは嫌だなあ。でもハロルド相手なら……優しく触ってくれるなら……」

開かれたページには『ミディアムフルバード』と書かれており、口元を囲うように髭が生え茂っており米噛みを通して頭髮と一体化している。今の爽やかな顎髭のバルトからは想像できない濃い髭なのは確かだ。

「まあ、無事に軍学校を卒業してこんな髭を生やすのが許される立場にまで出世できたらの話だけだな」

「……だな。その時は一緒に髭面セックスしようぜ。髭でゴワゴワしながらキスして、髭をエロい汁塗れにして、高え葉巻とかも吸って偉いやツムブかましながらさ」

そう言いながら、ハロルドは指先をバルトの太腿の上に載せて表面を撫でるように滑らせ、そのまま既に熱く脈打ち始めている大きな股間を優しく驚掴みする。ビクンツ！と大きくベッドの上でバルトの体を弾ませるが抵抗はなく、半ばそのような痴態をされるの予想したように足を広げ始める。

「ん……っ♡模擬任務が開始された初日に士官コースの生徒相手に大胆だな。昨日だって夜這いしてきたくせにそんなに雄交尾が恋しいのか？それとも模擬任務の……」

「勘違いすんじゃないぞ。オレはいつも通りお前にしてる事をしてるだけだぜ。……オレだってまだまだナイーブな心を持ってるうら若き青年なんだからなよー」

「まだまだ新生生だった頃に拷問の教科書を顔色一つ変えずに読んでいた奴の台詞とは思えんな」

「それはお前もだったろ？……ほら、本は何時でも読めるけど……チンポしゃぶんのは何時でもできねえだろ。さっさとチャック下ろせ」

「……今日は妙に急かすな。まあ、自慢の口マンで早く逝かせてくれよ。午後の講義に遅刻してしまったら困るからな」

バルトは溜め息を漏らしながら『髭の美学』を閉じてデスクの上に丁寧に置くと、代わりに開いたズボンのチャックから、既に硬く勃起していた巨根を力尽くで掴み出す。髭同様にきれいに整えられた陰毛も勢いよく溢れ出し、よく熟れた青臭い熱気が待ち受けるハロルドの顔面に包み込む。

ハロルドは時間を惜しむようにそのまま一気に根本まで咥え込み、喉嚢で竿を搾り上げながら力強いフェラチオを始める。敢えて涎を嚙り派手に舐め回して大きな水音を響かせて頭を前後させ、喉嚢への抽挿を繰り返して鋭い雁首の感触と快楽で恍惚とするバルトの表情を見上げる。

そして、その隙にバルトの太腿から脛、革靴にまでゆっくりと力強く指を這わせて密書らしき物体の感触が無いか確かめる。途中、頭を掴まれてフェラチオからイラマチオに変化して激しく喉嚢を凌辱されてしまうが、バルトの理性が飛んだことを良いことに革靴を脱がして中敷きや靴底に細工がないか確かめる。

加えて、ソックスガーターで固定された艶やかな黒い薄手の靴下の中や、ズボンの裾を捲り上げてズボンに隠しポケットや太腿にガーターベルトが無いかも確認し、更に腕をベツドに沈んだ雄尻にまで伸ばして口淫と模擬任務を同時に行っていく。

その様子はまるでハニートラップの如き動きで、その手際の良さを見ればハニートラップ部隊からスカウトが来るかもしれない。尤も、ハロルド自身はセックス大好きな絶倫野郎だがハニートラップについてはあまり乗り気ではないが。

ある意味、恋人のバルト相手だからこそセックスのモチベーションを保てながら、適切に任務をこなせているのかもしれない。

（密書が配られたのは今日の講義。速攻で部屋に隠してなきやまだ持参してるはず。靴に細工は無し、靴下の中にも無し、太腿にベルトやズボンに隠し収納もなし。ケツは……相変わらずのエロい桃尻で下着にも感触なし。……こりゃ宅配所に荷物持って行く口実で部屋に速攻で隠した線が高いか）

「はぁ、はぁ、はぁ……どうしたハロルドっ、もっとガッツイて来いよ。お前の喉マンはそんなガバガバじゃなかっただろう……がっ！」

「んぶっ!? ふあるふあったな……デユルルルルル! ジュボジュボジュボッ!」
「あっ! あっ! あっ! ああ……っ♡そ、そうだ! その強欲な強いフェラチオこそハロルドのフェラチオだっ! はあっ、はあっ、はああんっ! ハロルドっ、ハロルド
お……ッ♡」

喉深くに龟头をねじ込み雁首でハロルドの喉腔の粘膜を舐り犯しながら、バルトは頬を凹ませながら必死に自身の巨根をしゃぶる苦悶と恍惚に染まった表情を見下ろす。まだまだ教官や正規の軍人に比べれば若々しくハロルドが髭を生やしたら、どんな雄々しい男に成熟していくのだろう。正直、楽しみで胸が躍ってしまう。

だからこそ、一緒に軍学校を卒業し一緒に出世して一緒にアズアテラのために心身を捧げる立派な軍の高官になりたい。



自分自身は優秀な軍人になったハロルドと肩を並べるだろうか。『ミディアムフルベアード』の髭を生やしても不自然ではない立派な軍人になれるだろうか。発露する雄欲を滑稽に吐き出しながらも頭の隅で微かな不安がよぎる。

だからこそ、今回の模擬任務での失敗は許されない。密書を諜報員から守り切る任務もそうだが、密書を承った際の対応や身振り、精神状態や行動の変化等も審査の対象になるだろう。密書だけに意識を集中させていると足元を掬われるかもしれない。

だからこそ、教官への質問が終わるとすぐに私室に戻り、迅速に『計画』を遂行した。密書を守るためなのは勿論、不自然な振る舞いや態度を可能な限り見せないために。

自分の密書を標的にしている諜報員コースの生徒が、例えたった今自身の巨根を美味そうにしゃぶって股間に大きな TENT を張りながら、激しい腕の動きでバルトの下半身を探っている最愛の人物であったとしても。

「あっ♡あっ♡あっ♡あぁ……愛してるぞ……ハロルド……♡」

愛欲と任務の間で心の天秤を大きく揺らしながら、バルトは甘い声で愛を囁くとベッドの弾力を利用して普段よりも激しく腰を突き上げる。ハロルドの顔面に陰毛を押し付けるように激しいイラマチオを連続して行い喉膣を抉り、くぐもった野太い呻きを漏らさせながら脈打つ膣壁の狼狽を堪能する。

そのまま両腿でハロルドの頭を挟み込んで巨根を根本まで挿入してから固定すると、普段からは信じられない早漏ぶりで濃厚な精液を大量に流し込んだ。

「んづ！？んづ…っ、ゴギユゴギユゴギユ…：デユルデユルデユル…：ズジュールルルルッ！」

「はあっ！はあっ！はあっ！はあっ！あああああっ♡ハロルド、ハロルド、はろるどお…：！はっ、はっ、はっ…：。は、はやく全部のんでくれ…：午後のこうぎ…：はじまつてしまあ…：おあづ！？」

「ぷはあ…：！昼飯さっさと食い終わったからまだ時間あんだろ？…：誘ったお前が悪いんだぞ、バルト。最後までやらせてもらうぜ…：！」

未だ精液溢れるバルトの巨根から口を離れたハロルドは、体術の実技で習った要領で太腿の下に肩を入れて立ち上がり、バルトの上半身をベッドに勢いよく倒す。

そして、肩に膝を担いで横向きに寝かせたまま完全に露出した下半身を限界以上に開脚させて、ズボンから掴み出した精液塗れの巨根をそのまま雄膣に突き刺した。バルトの股関節の柔らかさによって熱く熟れた会陰が明けっ広げになり、垂れ下がった巨根と睾丸の下に隠されていた結合部もよく見える。

バルトの来ていた制服を乱暴に脱がして汗ばんで火照った白い胸板と腹筋を晒し、貪るように唇を塞いで舌を絡ませて快感の喘ぎを唾液と共に口腔に受け容れる。普段のセックスの正常位や後背位、騎乗位等とは異なる対面測位、ヤマトの雄交尾指南書で読んだ『松葉崩し』の体位は余計な尻の肉が邪魔せずより根本まで巨根が挿入できる。あっけなく前立腺を亀頭で捏ねくり割り、肉弁を破壊してS字結腸へと到達できる。

こうしてバルトが掌の上で淫らに理性を失っている隙に、ハロルドは腰を兎に角激しく前後させながら脱がせたバルトの制服に密書が隠されていないか確認する。表と裏のポケットは勿論、襟の裏、面積の広い背中部分、袖の中、ベルト下に隠れる裾部分……。紙らしき感触や何かを入れられる隠しポケットがないか徹底的に視覚と触覚で探し尽くす。

「はっ！はっ！はっ！……無え。やっぱ服には隠してねえか……んんっ♡だったら……体はどうだ……！？」

バルトの両腕の手首を脳天の位置で押し付けて腋毛の茂る腋下や脇腹を確認し、ディープキスをしながら腕を背中中に潜り込ませてうなじや背筋に密書が貼り付いていないかもしっかりと触れて確認する。

極めつけに、口腔に唾を垂れ流す隙に口腔内まで視認して、密書らしき物体がないかを確認する。腰を大きく動かして雄腔内部にも巨根の感触で密書らしきものがないのは確認済である。

文字通り、バルトの全身の内外を隈無く確認し終わるとハロルドは漸く一仕事終わった達成感で自然に妖しく微笑み、本来の絶倫で淫乱な本能を炸裂させてバルトの雄腔を犯し始めた。松葉くずしの体位による滑稽な開脚や舌の突き出し具合が見えるアヘ横顔は想像以上の淫らさで、普段の優等生面したバルトとのギャップをより一層大きく感じられて最高に興奮して腰の突き上げも鋭くなる。密書の搜索がなければ、もっと時間をかけて無様な痴態に堕としてやりたいと思ったほどだ。

「あっ♡あぁあぁあぁ♡あへ♡あひい♡あんあんあんあぁあぁ♡はるど
気持ち♡このポーズ恥ずかしくてきもち♡腰抜けちゃうっ、ごこの講義あるのにこ
しぬけて立てなくなってしまうよおっ♡」

「ふーっ！はーっ！ふーっ！はーっ！んおぉおぉおぉお：：：っ！お、犯す角度が変われば
締め付けられる角度も変わりやがって：：：！安心しろっ、そろそろ：：：オレも終わりだぜ
え：：：お前を徹底的に舐り回せたおかげで：：：心置きなく孕ませられるぜえ：：：♡バルト
オッ！！！午後の講義は腹ん中オレの子種孕んだまま、したり顔で出ちまえや！オラッオ
ラッ！ヴオオオオオオオオオッ！！！」

ハロルドは先程まで密書を探していたバルトの制服を顔に押し付けて、染み込んだ愛し
い雄の臭いと熱を勢いよく吸い込んで酩酊しながら怒涛の種付けに至った。鼻腔の奥で燦
る雄々しい熱気は脳を融かすような至福の微睡みをもたらし、自然と表情を恍惚に脱力さ
せてより濃い精液でバルトの腹筋を丸々と膨張させる。

松葉崩しで横向きのまま孕まされていくバルトの腹筋はぼつてりとベッドの上に重く載
り、中出しと射精の絶頂による痙攣で大きく波打ちながらシーツに汗を滲ませる。バルト
の巨根からも精液が壊れた蛇口のように噴き出し続け、床に脱ぎ散らかしたズボンや下着
を自身のドロドロの白濁液で雄臭く汚す。

「あぁ♡あぁ♡♡んぼおおおおお♡あぁダメえっ、俺のせいふくっ、ザーメンで
汚れちゃうっ！？ごごもこうぎあるのにい：：：ん♡あぁん：：：っ♡」

「はあ……！はあ……！ふおおおお……♡か、替えのズボン穿きや良いだろ……。気になんならコインランドリーで洗濯しとけ、パンツ一丁やマッパでランドリー使ってるヤツなんざ沢山いんだろ。ま、その間ケツマンから俺の子種漏らさないように注意しとかねえとなあ……へっへっへ♡」

「あつ、あつ、んあぁ……。そ、そうさせて貰うよ……。久々の雄交尾直後の学生寮内露出は……中々に興奮できるからな。……まあ、制服を洗っている間にトイレで腹の中は処理しておくよ、精々ハッテン中の同級生に捕まらないように祈っててくれよ……」

そう言い残し、バルトは巨根をティッシュで拭い雄腔から精液が溢れないように尻に力を込めたまま、堂々と全裸のまま精液塗れの制服と下着をランドリーバッグに入れて部屋を出ていく。男しかいない学生寮だからこそこできる大胆な行動だが、教官に見つかれば当然叱られる行動でもある。

尤も、今の時間は昼休憩中でわざわざ寮内に向かって休憩中の学生を監視する教官はそうそういないのが普通ではあるが。

「……さて、オレも後処理済んだら『家探し』でもするか。ったく、こんなこと昨晚ヤツた時に部屋の中の様子全部覚えておきや良かったぜ……」

口腔で未だ残るバルトの精液を口腔で味わって愚痴りながらも、ハロルドは主が出て行った部屋の中をバレないように密書の搜索を開始する。明らかに都合が良すぎる展開にバルトに操られているようで癪だが、絶好の機会なのは確かなので見逃す理由は無い。

「アイツは几帳面だからな。本の並びは頭文字順に並んだ……ま、取り出した形跡はないが……一応、背表紙の凸凹に沿って棚板にバレない濃さで鉛筆でマーキングしとか。クローゼットの中は……全室共通だから一見問題なし。扉の上や横に隙間は……無し、吊るされた制服やコートの中も……紙の感触なし。引き出し奥に隠し扉や二重底は……作られてない、畳まれた私服や下着はきれいに畳んだままで……中にも当然なし」

続けて探すのは、反対側の壁に置かれた、先程まで激しい雄交尾が行われていたベッドの死角。未だに二人分の雄の臭いや熱気が強く漂い、学生たちのハッテン場にいるような錯覚を覚える。

「ベッドの下には……うお、マニアックなエロ本ばかりか。S Mプレイに調教に主従プレイに……『マッスル髭オヤジ』シリーズ。アイツやっぱ髭フェチなんだな……。……ページの間に硬い紙の感触はなし、表紙にも隙間なし。マットレスの下は……寝押ししてる下着と肌着だけで、枕の下や中もそれらしいものは確認できず」

マットレスの上に乗って入念に体を弾ませるが、どこにも密書らしい紙の感触はなく、どこからも紙の擦れる音は聞こえない。ただマットレスから空気が抜ける音とベッドのフレームが軋む音だけが響き続ける。

「んで、大本命のデスク。デスクマットの下には無し。デスクランプやコーヒーマシンの下も無し。引き出しの中は……まあ勿論なし。こっちの引き出しも、こっちも……ちも……ん？」

最後の引き出しを開けた瞬間、ハロルドの脳裏に微かな違和感が生じる。他の引き出しと中を見比べるとその違和感はさらに強く頭の中を支配していく。

「……この引き出しだけ底が厚いな。どっかに取っ手やレバーは……」

狙いを定めた引き出しをデスクから引っ張り出すギリギリまで開けて中や縁を観察するが、何も怪しい箇所は見つからない。

「上もダメ、横もダメ、となると……」

ハロルドは問題の引き出しの底を裏から見上げる。

一見何も怪しい箇所が無いように見えるが、よく観察すると一番奥の角に小さな穴が開けられているのを発見する。デスクの上から適当なペンを取り出しペン先をその穴に差し込んで強く突き上げると、ガコンッ！と大きな音とともに引き出しの底が持ち上がる。

引き出しの中で二重底が開かれたのを確認すると、ハロルドはバルトが戻って来る気配がないか確認してから部屋の扉を閉めて二重底をゆっくりと持ち上げる。

「よっし、予想通り。バルトの野郎、あんな模擬任務がある前にこんな仕掛け作りやがつて……油断も隙も無えな。オレでなきゃ絶対見つからねえだろうなー」

本来の引き台の底とそれを覆うように被されていた全く同じサイズの二重底の間には、講義で見たのと同じ白い封筒が隠されていた。アズアテラの紋章が押された赤い蠟で封がされた横向きの封筒は、綺麗に整理されていた引き出しの下でバルトの手によって存在ごと密にされていた。

「……とは言え、まだ模擬任務の初日。流石にこの時点で奪っちゃうと奪い返される可能性もあるからな。……あの様子からしてオレがアイツの密書を探してるってのはほぼバレてるだろうし、下手に奪い合いになったら面倒だな……」

すると、ハロルドは折角見つけた密書を再び二重底の下に隠して引き出しの中を元通りに隠し直すと、引き出しを閉じて何事も無かったように元通りにしてしまう。

「よし、別の場所に隠し直されるリスクはあるが……最終日ギリギリまで放置だ。適当に探りを入れるフリしてまだ見つかってない感じを出して……講義直前に回収だ。部屋の鍵や引き出しに鍵付けられてもオレの諜報員コーストップのピッキング技術でこじ開けてやるからな」

頭の中で今後の計画を整理しながら、ハロルドは念の為に閉めていた部屋の扉の鍵を開ける。扉を開けて廊下に頭を出す、まだバルトの姿は見えない。

「……悪いなバルト、これも弱肉強食の軍学校の掟ってヤツだ。ま、お前なら元の成績が優秀だろうし模擬任務一回くらい失敗しても問題無えだろ。……ま、バルトの事だしまだ何か隠し玉があるだろうから、普段通りに接しつつ探りは続けねえとな」

ハロルドは扉を閉めてバルトの部屋に戻って、ベッドの下に隠されたマニアックなエロ本を今度は一冊一冊じっくりと読み込んでいく。やはり、他人の隠された性癖をこっそりと探って共有する行為は背徳的で最高に興奮する。内容によってはバルトの部屋なのに堂々と自慰をしてしまうかもしれない。

……そんな諜報員コースの恋人の様子を、廊下の曲がり角に隠れていたビキニパンツィー丁のバルトが腕を組んで観察していた。何ならば、扉が開けられるまでは部屋の前で堂々と聞き耳をしていたのだった。

「……流石はハロルド、二重底にこんな早く気付くとは。部屋に誘ってアイツの標的が俺なのか動向を観察するつもりだけだったが……さて、これからどう動くか……」

バルトは蓄えた自慢の顎髭を触りながら思考を巡らせるのだった。

……廊下を歩く他の学生たちからの困惑と驚愕と色欲の視線を向けられている中で。

* * *

そうして、模擬任務期間である一週間は瞬く間に過ぎ去り、それぞれのコースの学生の表情が粗模倣任務の結果を物語る様になっていた。

士官コースの学生は緊張と疲労に苛まれて誇大妄想に振り回される者あり、襲撃者に襲われて満身創痍な者あり、逆に返り討ちにした者あり、敵を情報戦で翻弄する者あり、他の学生と協力して守る者あり、中には敵に賄賂を送って見逃すよう説得する者あり……。諜報員コースの学生は高額なレリックで搜索する者あり、ピッキングで標的の部屋を物色する者あり、連携プレーで掠め取ろうとする者あり、傷害にならない範囲で痛めつけて白状させる者あり、ハニートラップで隙を生み出して奪取しようとする者あり……。

兎に角、密書を守り奪う駆け引きで早朝から深夜まで物々しく騒がしい日々が過ぎいき、初日に密書の場所を把握したハロルドには非常に鬱陶しい日々が終わりを告げたのだった。

「場所は変わらず、か。バルトにしちゃ不用心だが……オレの方が一枚上手という事で悪く思ふなよ」

ピッキングで侵入したバルトの私室にある引き出しの二重底から、初日から変わらず隠されていた密書を掠め取り懐にしまうと、ハロルドは再び扉でピッキングで鍵を閉めて何食わぬ顔で朝食を食べに食堂へと向かう。

「はい、配達ありがとうございます。……お、ハロルド。相変わらず遅かったな」

一週間前と同じく、宅配書で荷物を受け取っていたバルトが気付いて爽やかな笑顔で挨拶をしてきて、ハロルドも眠たげな表情で欠伸をしながら挨拶を返す。

「おはようさんバルト。何だお前、また本買ったのか？ ったくもう本棚パンパンに近いのに何処に置くんだよ。それともベッドの下に置くような……♡」

「こ、これは違うジャンルだ！ 講義で必要になる重要なヤツなんだよ！ エロ本ばかり買ってるお前と一緒にするな！」

「そりゃ悪かったな。んじゃさっさと朝飯食って講義に向かうか。なにせ今日は模擬任務の結果発表の日だからな。士官コースも諜報員コースも阿鼻叫喚の教室になると思うぜ。おぉーこわーい」

「全くだな。一週間学内で思考を使い体を動かし策謀を張り巡らせた、アズアテラ軍人になるための重要な模擬任務の結果だ。成績にも大きく反映されるだろうから最後の最後まで気を引き締めないとな」

「……おう、そうだな。んで、バルトはどうだったんだ？模擬任務の結果は……」

ハロルドからの質問に、バルトは口の前に人差し指を立てて沈黙を示すジェスチャーを取る。加えてウインクまで返すので思わずハロルドの胸がときめきそうになる。

「まだ模擬任務は終わってないんだ。そう易易と結果を公然と話しては危険だからな。ハロルド、お前も気をつけろよ。最後の最後のドンデン返しが待っているかもしれないぞ」

その言葉に、左胸の内ポケットに隠し持った密書を叩くように心臓の鼓動が強くなる。自分の任務成功のためとは言え、恋人を裏切ったのは多少心が痛む。だが本物の軍人になれば仲間を切り捨てることなど当然の選択肢になるのだろう。

あの吹雪の中の遭難で、自身とバルト二人だけで洞穴に避難して他の同期を捜さずに見殺しにした時のように。

「……そうだな、どんな任務も最後の最後まで気を抜かずにしねえとな。プロの軍人として安易な思考は許されない、どんな最悪な結果が待っているか事前に想定して動くのが必定……ってヤツだな」

ハロルドは一瞬にして不安に包まれる。確かにバルトから奪った密書は胸ポケットにしっかりと入っているのに、冷静としたバルトの態度は妙な胸騒ぎを引き起こす。

「……っ！？いけねえいけねえ、朝っぱらから重い事考えて変になっちゃう。さっさと朝飯食って講義行こうぜ！どんなに泣いても喚いてもこの講義で全部分かるんだからな」

「ああ、そうだな。互いに健闘を祈ろうか」

まだもう少し宿敵のままの恋人二人は、若干の緊張を漂わせながらいつものように二人一緒に朝食を食べようと列の最後尾に並んだ。

そのまま黙々とお揃いで頼んだパンケーキセットを食べ切ると、そのまま学生寮に戻って講義への準備を整えようとする。

「ハロルド、また後でな。昼食も一緒に食べよう。……いつも通りに」

「おう、勿論。……バルトも頑張れよ」

そして、二人は別々の教室に向かって席に着くと、講義開始の鐘が軍学校中に響き渡る。いよいよ模擬任務の終了を告げると同時に、その結果が開示される運命の瞬間が訪れた。

「『起立！礼！おはようございます教官！』」

「うむ、おはよう、座って宜しい……と言いたい所だが、今日は先ず模擬任務の結果を確認する。我々諜報員コースは設定された標的から密書を奪うのが任務目標だ。一人ひとり皆の前で任務の成果を報告してもらう。無事に密書を回収できた者は密書を机の上に出してから報告して座り、できなかった者はその旨を報告して立ったままでいろ」

要するに、失敗したものは見せしめとして立ち続けることになる。

「では学籍番号順に報告してもらおう。あくまで密書の回収ができたかどうかだけ報告し、具体的な回収方法、若しくは失敗理由に関しては後で各自レポートにして纏めてもらう。では学籍番号一番ディック、任務報告しろ！」

そこから教官の声も大きく荒ぶりだし、学生に向かって怒鳴るように報告命令を行っていく。

無事に回収できた者は安堵と誇らしさを胸に密書を机の上に取り出し大きな声で「無事に密書回収成功！」大声で返答する。

教官はその返答に反応せずに出された密書をつぶさに観察し、懐から取り出した特殊なライトで封筒とカードを照らして学生には秘密で記されていた記号を確認し、それから封筒を丁寧に破って開けて中のカードの記号と同一であるか確かめる。

「……うむ、封筒と記号のカードは両方一致。ディックの標的である……フィッシャーマンの記号とも一致。任務成功だ！さあ次の者もさっさと報告を続けろ！」

突如として出現した特殊なライトでした反応しないインクによる真偽確認に、教室内は一層の緊張感に包まれる。それは、とある不正をした学生を一瞬にして炙り出せるトラップであったのだ

「……カードの記号は標的と一致しているが……カードにも封筒にも不可視インクの記号なし。おまけに封筒の紋章も本物と一致しない。一度回収したが奪われ、記号を確認した上でカード偽造を『謀った』な、任務失敗、立ってろ。次だ、さっさと正直に報告しろ」

奪い合いが発生する以上、封筒の中身の記号を魔法やレリック等で確認した後で奪い返される可能性もある。その上で再び回収できなければ封筒と記号カードの偽造に走る学生は多い。そんな不正を防ぐための教官側が仕込んだブービートラップである。

次々と任務報告は進み、無事に席に座れた学生よりも立ったままで肩を落とす学生が多くなつていき教室の空気は重苦しいものとなる。

そんな中、遂にその時がきた。

「次、ハロルド。任務報告をしろ！」

「はいっ！ 標的である士官コースのバルトより密書の回収に成功しました！ 確認をお願いします！」

ハロルドは胸ポケットから取り出した密書の封筒を机の上に置くと、背筋を伸ばして教室中に聞こえる大声で高らかに任務成功を報告した。大丈夫だ、オレは決してあんなへまは起こさない。間違いなく本物の密書なのだから

「うむ、封蝋の紋章は……間違いなく本物。封筒には……不可視インクによる記号があり、標的であるバルトの記号とも一致している。流石は諜報員コースのトップ成績者といったところか」

ハロルドの実力を熟知している教官が若干表情を緩めながら封蝋を割って封筒を開けて中に入っていたカードを取り出す。

しかし、カードを一目見た途端に怪訝な表情を浮かべる。

「な、何だこれは……封蝋も封筒も間違い無く本物だが……おい、ハロルド！これはどう
いうことか説明しろ！」

「うえっ！？あつ、はい？ど、どういう事とは……」

「兎に角カードを見てみる！クソッ、バルトめ！流石は士官コースのエリートという訳
か。これでは諜報員コース教官の面目丸潰れ……」

士官コースと諜報員コースの教官間のライバル意識の吐露を完全に無視してハロルドは
手渡されたカードを確認する。それは只のカードではなく売店で売っている似た大きさと
感触がする、一枚のランプだった。

中央に大きな赤いハートが描かれた、ハートのエース。そこにはバルトの美しい筆跡で
短くメッセージが記されていた。

『I Love you』

「ばっ……あんの野郎……！んな時にこんな……こんな告白とか、恋愛小説のキザ主人公
かよ……！」

そもそも、封蝋も封筒も間違いなく本物であるのに中に入っていたカードだけが入れ替
えられていたのか、ハロルドには全く分からなかった。こちらを誘い込むように私室に誘
ったバルトの余裕ぶりを見るに、初日に雄交尾の後に封筒を見つけた時には既に交換が済
んでいたのだろうか。

だったらあまりにも早すぎる。

封蠟を剥がすだけでもかなり慎重な作業を時間をかけて行わなければいけない。宅配書で合流したのは講義が終了した直後だ。バルトが先に出ていたとは言えそんな時間は無かったはずだ。

そもそも、あの後何度か抱き着いたりセックスしたりして制服や体を入念に確認したし、バルトの私室に忍び込んで封筒の位置が変化してないか確認するついでに搜索もしたが、何処にもカードは隠されていなかった。

「きよ、教官！オレにもさっぱり分かりません！申し訳ありません！」

「ぐぬぬぬ……こ、この場合は……取り敢えずハロルドは着席許可する！あんの顎髭の若造め……士官コースで最優秀だからってふざけたことを……！」

「しよ、承知しました！」

取り敢えず命令通りに座ったハロルドだが、全く納得はできなかった。確かバルトは魔法は使えなかったはず、なのにまるで魔法でも使われたように掌で踊らされた感覚に陥り怒りよりも困惑、そして教室内で愛の告白をされた羞恥で頬が紅潮してしまう。

「あんにやろ……。昼飯前にこっそり搾ってやるから覚悟しとけよ……！」

時は一週間前、士官コースで個別質問に挑む瞬間からバルトは計画を立てていた。

教室の横にある倉庫に呼び出されたバルトは、粗末な木製の椅子に座って教官と一対一で向き合っていた。

「教官、早速ですが何店か質問にお答え頂きたいのですが」

「分かった。……お前のことだから既に頭の中で諜報員コースの学生を出し抜く作戦はある程度立っているようだな」

「それは教官の返答によります。……先ず一点目、我々が諜報員から死守すべきなのは密書の全てでしょうか？……言い換えれば、中のカードだけを死守すれば目標達成となるのでしょうか？」

バルトの質問に、教官は若干驚いたように目を見開きつつ若干悩みながら腕を組む。

「うーむ……可能であれば封筒、封蝋、カードを全て備えた上で守り切るのが得策だが……、密書の死守となれば最優先はカードの死守だろう。カードは重要書類を想定している上、これだけは何としても諜報員コースには奪われてはいけないだろう。……別に封蝋と封筒を犠牲にして良いという訳では無いが、それが合格の最低条件になるだろう」

「分かりました。ではもう一点、教官は先程部外者への協力は不可と申されましたが、その部外者が今回の疑似任務について何も知らない『無知の第三者』も対象となるのでしょうか？」

「む、『無知の第三者』？どういうことだ、詳しく説明しろ」

突然でてきた単語に教官は大いに戸惑うが、バルトは普段の冷静な口ぶりで続ける。

「要するに、模擬任務に関して何も知らない人物に対して、結果的に本人が気付かない内に密書の死守を手助けするような手段は取っても大丈夫なのでしょうか？実際の密書でしたら一般人に危険が及ぶ可能性があります。今回はあくまで軍学生による模擬任務。そこまで厳しい縛りは無いと思いますが……どうなのでしょう？」

そこまで聞いて、教官は何かを閃いたように小さく声を上げると、続けてニヤニヤと笑いながらバルトの質問に答える。どうやら、バルトの立てた作戦の詳細を把握できてきたようだ。

「うむ、問題ないな。但し、密書そのものを『無知の第三者』に発見されたり認識された場合はその時点でアウトだ。一般人とは言え、アズアテラ軍に長い間協力している人々だ、些細な違和感は即座に報告されるだろう。その覚悟はしておけ」

「分かりました。そして最後の一点ですが……」

バルトが質問しよう身を乗り出すと、教官が掌を突き出して制止する。その表情はバルトの計画を理解した上で質問の内容も事前に分かった風なニヤリ顔を浮かべていた。

「『一時的に密書を学園外……いやアズアテラ外に運び出しても大丈夫か？』……そんな所だろう」

「……さすがは教官、その通りです。可能でしょうか」

「可能だ。詳細は防ぐが、隠し場所として学園外を選択する学生は毎年多い。尤も、雪の中に埋もれて見つからなくて無駄になる場合も多いが……お前は違いのだろうか？」

「はい。宅配所からパイス・ブランの古書店に送る木箱の底に密書代わりのカードを隠す予定です。……勿論実在しない古書店の名前と住所を記載して、丁度一週間で軍学校に返送されてくる様に調整して」

「成る程。宅配業者に密書を守って貰うという事か。だが宅配が悪天候で遅れたり荷物が紛失したり、何より密書カードが見つかった場合は失敗だ。そのリスクも分かっているんだな？」

「勿論です。いかなる場合でもリスク無しで大きな成功を得るのは困難だと思います。この程度のリスクは覚悟の上です」

そう力強く語るバルトの態度に一切の物怖じは感じられなかった。完全に覚悟を決めた軍人の力強さと決断力が教官にも伝わる。

「ふむ、そこまで既に計画しているのか……ならば、封蝋を砕かずに密書カードを取り出す方法も考えているのだな？」

「はい、封蝋は非常に脆い物体です。熱すれば溶けるし固まれば割れやすくなる。……ですが、割れなくなるほど急激に冷やして凍結させれば剥がすのは容易です。何せここはアズアテラ、封蝋を完全に凍結させるだけの雪は十分に積もっています。剥がした後は人肌で接着面を温めて溶かせば再接着も可能です。この場合封筒が濡れてしまう可能性がありますが、封筒は一週間もすれば乾きますし不可視インクも耐水性なので記号が歪んでしまいう心配ありません」

「……やれやれ、不可視インクについても氣付いていたのか。バルト、全くお前は未恐ろしい奴だな。将来は軍の大物になっているかもしれないぞ」

「恐縮です。先ずは購買所に行つて密書カード代わりとなるランプを購入し、それから封蝋を雪に押し付けて凍結させて剥離。カードを入れ替えて私室から適当な本と木箱を用意してその中に密書カードを隠して宅配所から送り出す予定です。一週間後に無事手元に戻ってくるのを願つて。偶然、今日宅配所で受け取る荷物もあるので実に好都合でした。ただ……」

バルトは最後、不安そうな表情を浮かべて呟く。

「相手が……ハロルドだったら少し……いや、とても厳しいかもしれません」

「えー結局密書は奪われたが、封筒と封蝋は無事に獲得できたので半分成功半分失敗とのことでしたー。……こんの今畜生め、オレを散々弄くった上にあんなラブラブ告白カードをアイツらの前で出させるなんて、顔から火が出るかと思つたぜ」

地獄のような雰囲気の中で行われた模擬任務の成果報告が終わり、ハロルドはバルトと一緒にミートボール入りポロネーゼを豪快に食らっていた。外を見ても雄交尾をしても白一色の学生生活の中で見るポロネーゼの赤褐色は熱い炎を連想させて食欲と性欲を促す。

「おい、そんなに勢いよく啜るなよ。ヤマトの蕎麦を食ってるんじゃないぞ。ちゃんとフオークに巻き付けてゆっくりと丁寧に食べないと服にも髭にもソースが飛ぶ。ちなみにスプーンを使うのは子供だけのマナーで……」

「ムグムグムグ……いまふぁひょんなマナーひたひやへえんひやよ！……ふーっ、飯の時のコーヒーうめー！って、そうじゃなくてハニトラ成績トップのオレを意気揚々とハニトラにかけやがって……。ぜってー誘った時にオレの標的が自分だって分かってただろ」

「まさか、流石にそこまで俺は分らないよ。……まあ、ハロルドの標的が自分なのか確認する迷惑はあったけど、まさかあそこまで上手くいくとは思わなかった。恋人同士で奪い合いとか皮肉だよな」

「じゃあいつくらいで気付いたんだ？オレの標的がお前だって」

口の周りをボロネーゼソース塗れにしながら、スパゲッディを巻いたフオークの先端をバルトに向けて問い質す。まるで無不機嫌で不貞腐れている子どものような格好である。とても諜報員コースのトップ成績者とは思えない幼稚っぷりだが、その極端な性格が臨機応変さが求められる諜報員には向いているのかもしれない。

「……お前がズボン履いたまま俺にフェラチオしてくれてる時、自分のチンポをオナニーしなかった時かなあ。普段のお前なら絶対にケツマンへの挿入考えてチンポ整えるはずだが、あの時はズボンが濡れても拘らずに俺の下半身弄ってたからな。絶対に密書が無いカボディチェックしてると思った」

「あー……やっぱバレてたか。せめて片腕だけでもオナニーしときゃ良かったなー」

「まあどの道、その後の本番で俺を犯しながら制服脱がして露骨に探ってたからな。アレで完全にお前の標的が俺だと確信した。……正直ヒヤヒヤしたよ。リスク覚悟で俺が誘ったとは言え、一步でも対応が遅れてたらお前に密書見つかったたかもしれないし」

「士官コースのやつがリスクを怖がってたら何も出来ねえからそれはそれで良いんじゃないか？ 尻拭いさえしてくれば、そーゆー奇抜で豪快な計画も部下に受け容れられるかもしれねーだろ」

バルトは苦虫を噛み潰した表情をして首を横に振る。

「……いや、今回はリスクが全部俺一人に返ってくるから出来た無茶だ。もし仲間や部下がいたら絶対にできないな。いつかの猛吹雪での遭難の二の舞いはうんざりだ」

溜め息を吐きながらバルトは至極キレイな所作でフォークに巻き付けたスパゲッティを口に運ぶ。制服にも髭にもボロネーゼソースが飛び散らない美しい食べ方はハロルドとは正反対で、几帳面で真面目な性格が滲み出ている。故に、責任を一人で背負いがちで将来は気苦労の耐えない胃腸の弱い軍人になりそうではある。

そんなバルトの将来の姿を臆気に幻視しながら、ハロルドは瞬く間にボロネーゼスパゲッティの山を崩していく。その途中、ミートボールを突き刺したフォークを再びバルトに差し出す。

「ほれ、あーん」

「……突然何の真似だよ」

「オレからの餞別。模擬任務成功おめでとーの気持ち……の一割くらい」

「じゃあ残り九割は？」

「んなもん決まってるだろ」

ハロルドは妖しい笑顔を浮かべながら口周りを汚すボロネーゼソースを舌で舐め取り、片腕の指で筒を作り、何かを掴んで扱くようなジェスチャーを見せる。

「……明日は休講日、久々に模擬任務関係なしにガッツリ犯り合おうぜ……♡」

「よし、ならば快く……頂きます」

差し出されたミートボールを、バルトは首を伸ばしてパクリと頬張る。肉汁をあんまり感じないパサパサ食感には正に大量調理の食堂飯だが、再び気の置けない恋人同士に戻れた喜びで妙に美味しく感じる。

何より、明日から……何なら今晚からハロルドの雄肉から溢れ出す濃厚な雄汁を大量に接種できるのだ。その前戯としては申し分ない行為だ。

「それじゃあ、どっちの部屋で犯る？最近俺の部屋ばっかだったから今度はハロルドの部屋で犯るか？あっちのほうがエログッズ多くて楽しめるしな」

「おっし、決まり！オレの雄臭え汚部屋で今晚から久々のセックス三昧だ。掃除面倒だからゴムはそっちも持ってこいよ。もうゴミ箱がザーメンティッシュで満杯になっちゃってるんだよ」

「だから早くゴミ捨てに行けとあれほど言ってるのに……。今日はゴミ収集の日だろ、お祝いセックスはその後からな。部屋の掃除手伝ってやるから」

「へーい、ありがとさん。……まーまた一瞬でゴミ箱満杯になりそうだからなあ」
「……だな」

今晚からの雄臭い愛欲の狂宴に思いを馳せながら、二人は笑顔を浮かべて目の前のボロネーゼの山を切り崩していく。その光景は完全にデートを楽しむ恋人の姿そのもので、既に察している周囲の同級生や教官たちからの羨望と嫉妬を一身に受けているのだった。

「はっ、はっ、はっ……！はがあっ♡はあああっ♡だ、大浴場であんな犯してやったのに……まだまだ足りねえってか……この絶倫髭野郎め……んづ♡はぁーっ！」

「あんっ、あんっ、あんっ……あっ、ぐう……♡大浴場じゃ俺が犯られっぱなしだったからな、やっぱタチネコ平等にやらないと体が満足できないんだよ……あふっ♡あんっ♡ああ……ハロルドのケツマンはやっぱ最高だ、俺のチンポの形をいつまでも覚えてくれて嬉しいぞ……ふんっ！」

「んはあっ！？あ、相変わらずオレのイトコ挟ってくるねえ……マイバディ兼マイハニー……♡学生ん頃の真面目さは何処に行った……ああんっ♡はっ♡はっ♡はっ♡も、もつと奥まで……奥までチンポ突っ込んでくれよ、バルト……！」

「あっ……ぐう……！お前のケツマン、締りが強すぎんだよ……おっ！」

「んほおっ♡はっ！はっ！はっ！はっ！ほら、もうアへ顔になってるぞハロルド！普段の余裕こいた態度は何処行つた、俺の拷問を耐え切ったお前らしくないぞ。それともっと激しいのが欲しいのか？」

「はあっ、はあっ、はあぁあぁ……♡だ、誰がこんな簡単にアへ顔浮かべるかっての……熱っ！あっっ！？モク押し付けんなこのドS！また火傷痕増えるだろが！」

「今更火傷痕が一つ二つ増えても問題ないだろ？……お互い、もう学生の頃のキレイな背中には二度と戻れないんだからな。……俺だってもうモクの味覚えた熟れた大人になっちまったからな」

巨大なダブルベッドの上で仰向けに押し倒されたハロルドを、葉巻を吸ったバルトが激しく犯していた。大浴場で大勢の前で犯された礼とばかりに、二人が宿泊しているホテルの部屋でじつくりと周囲から邪魔されずに雄牝の最奥を犯す。

吸っていた葉巻を指で摘んで恍惚の表情で煙を吐くと、ハロルドの首筋や胸板、腹筋や鼠径部と至る所に押し付けてキスマーク代わりの火傷痕を残す。大浴場で行ったら間違いなく注意されるプレイだろうが、二人だけの愛の巣では邪魔は入らない。

質素堅実な生活が基本とされるアズアテラでは絶対に見られないような綺羅びやかなホテルのスイートルームは、久々の休暇で普段使う暇のない給金を発散するには良い豪華さだった。

以前経営されていた国営カジノの隣接設備だったようだが、謎の爆発によって破壊されて以来ホテル経営が主な収入源になっているらしい。窓から眼下を見下ろせばパイス・プランの白や城下町から漏れる光がポツポツと、まるで星の光のように輝いてロマンチックな雰囲気を作り出している。

だが、そんな夜景を尻目にバルトとハロルドは未だに燃え続けている雄欲を発散するため、そして互いに鎮まらない愛欲を貪るために雄交尾を継続する。

攻守は逆転して今度はバルトがハロルドを犯し、何時かの拷問訓練思わせる激しく執拗な凌辱を行ってベッドのスプリングに大きな悲鳴を上げさせる。理知的な表情は嗜虐性癖を呼び覚ましてより濃厚な肉棒の抽挿を繰り返し、前立腺を飴のように舐め続け、肉弁を本のページののように捲り、S字結腸を鞭で叩くように撾る。

大浴場で被虐欲を満喫した後の嗜虐欲への転回は一層ハロルドへの性的加虐性を強め、普段は決して見せないハロルドの惨めで滑稽な痴態を晒させながら墮とそうと胸が昂り肉棒も痛いほどに勃起を継続して腰を雄膺へと誘導させる。

「あっ！？あっ♡あぁーっ！バルト、バルトそこヤベエ…：あひっ！？はひいっ♡はっ♡はっ♡はっ♡はっ♡♡そこおっ！オレそこダメだっでしっでんだろおーっ♡♡♡」

「ふうっ！ふうっ！ふうっ！ふ…：ぐおおっ♡し、知ってるさ、一体何年お前とこうして盛り合ってると思うってんだ。…：今日はお前が完全に陥落して淫靡に墮落する痴態が見たい、アへ顔浮かべて無様に舌を突き上げて足ピンアクメしてる姿が見たい…：そう思うてるだけだ」

「うひい…：ひい、ひい、ひい…：この性悪陰険エロ髭オヤジよお…：♡ぐひいっ！？はっはっはっはっひゃあぁあぁっ♡♡♡」

「んあ…：うおおおおお…：♡そ、それはお前も同じだろハロルド。俺達が本当にどれだけ性悪で陰険でエロい髭オヤジだと知ってるのは…：俺とお前だけだからな。…：愛してるぞ、ハロルド…：♡」

口一杯に葉巻の煙を含んだまま、バルトはハロルドにディープキスを行って甘く苦い煙を唾液とともに舌で艶めかしく攪拌させる。本当は催淫剤入りの特製葉巻を使いたかったが、流石にアズアテラ特製の拷問道具を一個人の趣味のために国外に持参するのは機密情報漏洩に繋がる可能性があった。

それでも、現状のハロルド相手には普通の葉巻で十分だった。愛する男が吐き出した大人の甘く苦い香りと、口周りに生い茂った立派な髭が触れる感触だけでハロルドはバルトに籠絡されて甘えた仕草で抱き着いて自ら腰を振り始める。

まるで大浴場でバルトがハロルドに犯された時のように。

「あふっ、はふっ、ふわぁ……♡バルトお……オレ、おまえ……しゅぎい……♡もっと、もっとオレ気持ち良くさせてえ……、もっとオレをアへしやせてえ……♡」

「ジュルジュルジュルジュル……んっ……♡俺もだぞ、ハロルド。お前のそんな痴態を見られるのは俺だけ。俺以外に奴にそんな滑稽なアへ顔を見せるなんて……決して許さないからな。折角生やした立派な口髭を淫らに塗らせるのは俺だけなんだからな……♡」

バルトによる強い独占欲を一身に受けて激しく攻め立てられるハロルド。口腔内の唾液と煙を全て啜り飲む勢いで頬を凹ませてディープキスに夢中になりながら、バルトの背中に爪を立てる。歴戦の戦いの中で増えた多くの傷跡の中では全く目立たない小さな傷を残し、さほど問題にはならない程度の流血を伴わせる。寧ろ、その快樂の果に与えられる痛みこそがバルトの興奮を一層強めさせる。

「んぶっ、ジュボッ、ジュボッ、ジュルル…んっ、んああ…！そ、そろそろ一発出すぞハロルド…！お前が欲しくて欲しくて堪らなかった俺の…最愛の髭面オヤジからのザーメン、奥底に沢山孕ませてやるぞ…♡んっ、い、いきなり締め付け強めやがって…この悪食髭面オヤジめ…お望み通り出すぞ…！一滴残さず孕んで、可愛い声で喘ぎ狂え、ハロルドお…っ！イクウウ…っ！」

「おぶっ♡はぶっ♡チュポチュポチュポ…ふあ、ふああ…♡ばるとお…♡ばるとお♡はあっはあっはあっはあっはあぁあんっ♡お、オレもイキそ…漏れそお…！おぶおぶおぶおぶおぶおぶおんづ…！好き、だいしゅぎい、バルトおおお…っ♡」

熱い激流がハロルドの強く引き締まった膣壁を押し拡げながら体内へと注がれる。硬く熟れた亀頭ですり潰された前立腺に熱と水圧で追い打ちをかけ、結腸内部を濃厚な白濁の雄汁で満たして腹筋を一気にボコッ！と膨張させる。

学生時代からの旧友であり戦友であり恋人であるバルトに完全に墮とされたハロルドの表情からは、普段の飄々とした不敵な雰囲気は消え去り快樂の熱情に支配されて蕩けた悦びに至ったのが見て取れる。

ハロルドの巨根から射出される精液は汗に火照った筋肉に浴びせられ、生々しく残った傷跡を隠すように分厚い白濁の膜を張りながら流れていく。髪を乱したまま焦点の合っていない両目で虚空を見上げるアへ顔まで容易に精液は届き、底なしに絶倫な髭オヤジである自身の精液の苦く臭いを激しい呼吸とともに体内に吸収させる。

上澄み射精の勢いが衰えていくにつれて、堪えるように爪を立てていたバルトの背中から両腕が離れてベッドの上に投げ出される。名残惜し気に初戦の終わりを告げるディープキスをバルトから与えられて口腔に流れ込んだ精液を互いに味わいながら、種付けし終えた肉棒を引き抜かれると同時に甘えた嬌声を上げて身震いする。

互いに全身から溢れ出す汗と熱気で部屋を満たし、肩と腹筋を上下させる荒々しい呼吸で悦びの余韻に浸りながら、ハロルドは寝返りを打って勃起を維持した巨根から射精の残滓をシートに注ぐ。

バルトはハロルドの汗の湿り気と体温の熱が残るシートに体を倒して背後から抱き着こうとするが、その傷だらけの背中を見て思わず葉巻を強く噛んでしまう。以前じつくりと雄交尾に浸った時よりも増えた大きな傷跡の中に微かに残る小さな爪痕。まだまだ若い軍学生時代の模擬任務中に仕掛けられたハニートラップ時、愚かにも我を忘れてしがみついた時に付けた若さ故の暴走の跡がひどく懐かしい。

「はあ、はあ、はあ……また傷が増えたな、ハロルド……」

「おづ♡おづ♡おお……♡ふうー、ふうー、ふひいいー……。んーそうか？もう何度も死にかけたから分かんねえや。今だってガチで昇天しそうでガチャバだったぜ、あーマジでお前のガキ孕んじまいそう……。♡そしたら寿退官でもするか？」

「バカ言え、お前だったら俺に育児頼んで喜び勇んで任務に向かっちゃまうだろ。それともトルケルやスヴェン辺りに押し付けそうだな」

「あーそれも良いかも、パティ辺りは喜んで受けてくれそうかもなー、リーサは……ガチの母親として刷り込まれそうでヤダなあ。でも実際に産んだらまた気持ち変わっちゃうかもよ？腹を痛めて産んだ子はやっぱり愛おしいって言うじゃん？」

「……俺よりか？」

「えー、自分の子どもに嫉妬しちゃう系パパは嫌われちゃうぜ。将来『パパくさーい』って言われちゃうぞ」

「ははっ、それは困るな……やっぱり父親として俺も子育てには参加しないとな」

二人でありもし無い軽口を叩きながら互いの肉体を撫であって、その愛おしい存在の熱と脈を確認する。生者の特権……でも無いらしい激しい雄交尾の後の心地よい疲労感はある。計な思考を忘れさせてくれて無垢だった軍学生時代に戻れる気がする。

「なあ、明日はバライまで行って観光しようぜ。美味しい飯の店が沢山あるし凍って無え港を見るのも中々風流だと思うぜ」

「まさかお前の口から『風流』なんて言葉が出てくるとは。……だが悪くないな、噂では焼き立てのパン屋が美味いと聞いた。パンを買い込んで食べながら町並みを堪能するのも悪くない」

「だろ？……何なら、パイス・ブラン以上に有料無料ハッテン場が充実してるって噂だし、アズアテラじゃできない野外乱交で現地の住人とねっとりどっぶり交流するのも最高だと思っぜ♡へへ……」

「おいおい、ユルトの宿屋の噂も確かめないといけないのに体が幾つあっても足りないぞ。体力と精力はまあ問題ないが、時間は許してくれないぞ。きちんとしたスケジュールを決めておかない」と

「えー、そーいうのはお前にパス！オレは暫く休んで着床するのベッドの上で待ってるから代わりに頼むぜーバルト♡……あとモクの後始末ちゃんとしろよ。トルケルの代わりに今度は従業員に叱られて出禁になっちまう」

「ははっ、まあそうなると思ったぜ。モクはもう暫く吸いてえから大人しくスケジュールでも立てておくわ」

「ありがとーバルト♡流石はアズアテラの副司令様！」

「悪いが今はただの恋人との旅行中の髭オヤジだ、身分バレるような真似はすんなよ。厄介事に巻き込まれるのは御免だ」

「へいへい。……愛してるぜ、バルト」

「……俺も愛してるぜ、ハロルド。お前が思ってる以上にな」

ハロルドは再び寝返りを打ってバルトと視線を合わせると、普段の怪しさとは無縁の無邪気な笑顔を浮かべて笑い出す。バルトも葉巻を指に挟んで口元をフリーにすると、普段は決して浮かべないような満面の笑顔を浮かべ返す。こんな無邪気に笑いあったのは久しぶりだろうか、日々の危険な任務に忙殺されて忘れてしまっていた。それとも既に若造に席を譲る番になったのかもしれない。

どの道、窓の外はまだ月が浮かび星が瞬き、夜明けまではまだ遠い。スケジュールを立てるにしても、二回戦を開始留守にもまだ十分な時間が残されている。

とは言え、何せ久々のデート旅行だ、昔の話をする暇など無く、未来の話を語るだけで精一杯なのだから。

どの道、明日もまた良い一日を愛するバディと二人だけで過ごせそうなのは確かだろう。こう見えて、この二人の思考は似通っているのだから。

了

PIXIV FANBOX



<https://udonovel.fanbox.cc/>

発行日：2025/11/16（土）

印刷所：株式会社ポプルス

<https://www2.popls.co.jp/pop/>

発行者：ミスターウッド

pixiv：807475

Skeb：@makisenovel39

X（旧 twitter）：woodandleaf

アドレス：woodocean2@yahoo.co.jp

表紙：種（敬称略）

Skeb：@energy_camdy

X（旧 twitter）：@energy_camdy

* 本作は個人作の非公式ファンブックです。

* 本作内容は原作関係者様含め、いかなる実在の個人、団体、思想、宗教等とも一切関係ありません。

* 本作の内容、挿絵の転載・複製・再配布・転売等を禁じます。

* 18歳未満の方の閲覧は固くお断りいたします。



Another world of Dragon vein R